

Ⅲ. 分担研究報告

令和5年度 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業

分担研究報告書

全身性エリテマトーデス/原発性抗リン脂質抗体症候群の診療ガイドライン作成に関する研究

【研究分担者・SLE/PAPS 分科会長】

渥美 達也 北海道大学病院（病院長）

【研究分担者】

天野 浩文 順天堂大学医学部膠原病内科学講座（先任准教授）
石井 智徳 東北大学病院臨床研究推進センター（特任教授）
河野 通仁 北海道大学病院リウマチ・腎臓内科（助教）
武井 修治 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科小児科学教室（客員研究員）
田中 良哉 産業医科大学医学部第1内科学講座（教授）
花岡 洋成 慶應義塾大学医学部リウマチ・膠原病内科（専任講師）
村島 温子 国立成育医療研究センター周産期・母性診療センター（主任副センター長）
森 雅亮 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科生涯免疫難病学講座（寄附講座教授）
保田 晋助 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科膠原病・リウマチ内科学分野（教授）
山岡 邦宏 北里大学医学部リウマチ膠原病・感染内科学（教授）
湯澤由紀夫 藤田医科大学医学部腎臓内科学（学長）

【研究協力者】

有沼 良幸 北里大学医学部膠原病・感染内科学（講師）
一瀬 邦弘 島根大学医学部膠原病内科（教授）
岩田 恭宣 金沢大学付属病院感染制御部（特任教授）
植木 研次 九州大学大学院医学研究院病態機能内科学 腎臓研究室（臨床助教）
上野 匡庸 産業医科大学医学部第1内科学講座（助教）
大久保直紀 産業医科大学医学部第1内科学講座（非常勤助教）
大村浩一郎 神戸市立医療センター中央市民病院膠原病・リウマチ内科（部長）
奥 健志 北里大学医学部リウマチ膠原病・感染内科学（准教授）
勝又 康弘 東京女子医科大学医学部内科学講座膠原病リウマチ内科学分野（講師）
要 伸也 杏林大学医学部 腎臓・リウマチ膠原病内科（教授）
金子佳代子 国立成育医療研究センター周産期・母性診療センター 母性内科（診療部長）
金子 祐子 慶應義塾大学医学部リウマチ・膠原病内科（教授）
川上 貴久 杏林大学医学部 腎臓・リウマチ膠原病内科（講師）
川人 豊 京都府立医科大学免疫内科学（病院教授）
菊池 潤 義塾大学医学部 リウマチ・膠原病内科（講師）
久保 智史 産業医科大学医学部 分子標的治療内科学講座（准教授）
桑名 正隆 日本医科大学大学院医学研究科アレルギー膠原病内科学分野（教授）
小杉 智規 名古屋大学大学院医学系研究科病態内科学講座腎臓内科学（准教授）
近藤 裕也 筑波大学医学医療系膠原病リウマチアレルギー内科学（講師）
佐藤 伸一 東京大学医学部皮膚科学教室（教授）
杉浦 真弓 名古屋市立大学大学院医学研究科産科婦人科（教授）
杉本 智裕 広島大学病院リウマチ・膠原病科（助教）
田村 直人 順天堂大学医学部膠原病内科学講座（教授）
中川 詩織 金沢大学附属病院腎臓内科（医員）
新納 宏昭 九州大学大学院医学研究院医学教育学講座（教授）
西脇 宏樹 昭和大学藤が丘病院内科系診療センター 内科（医師）
長谷川 稔 福井大学医学部皮膚科学（教授）
長谷川靖浩 北里大学医学部リウマチ膠原病・感染内科学（助教）
馬場 俊明 国立国際医療研究センター国際医療協力局（医師）
林 宏樹 藤田医科大学医学部腎臓内科学（准教授）
平田信太郎 広島大学病院リウマチ・膠原病科（教授）
平本 和音 慶應義塾大学医学部リウマチ・膠原病内科（助教）
廣村 桂樹 群馬大学大学院医学系研究科腎臓・リウマチ内科学（教授）
藤枝雄一郎 北海道大学病院リウマチ・腎臓内科（助教）
細矢 匡 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科膠原病・リウマチ内科学分野（講師）
升谷 耕介 福岡大学医学部腎臓・膠原病内科学（主任教授）
松隈 祐太 九州大学大学院医学研究院病態機能内科学 腎臓研究室（助教）

丸山 彰一 名古屋大学大学院医学系研究科病態内科学講座腎臓内科学（教授）
 箕輪健太郎 順天堂大学医学部膠原病内科学講座（准教授）
 宮前多佳子 東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター・小児リウマチ科（准教授）
 森下英理子 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻病態検査学講座（教授）
 矢嶋 宣幸 昭和大学医学部内科学講座リウマチ膠原病内科部門（教授）
 山崎 雄一 鹿児島大学病院小児科（講師）
 横川 直人 東京都立多摩総合医療センターリウマチ膠原病科（部長）
 吉田 雄介 広島大学病院リウマチ・膠原病科（助教）
 和田 隆志 金沢大学（学長）

研究要旨

全身性エリテマトーデス(SLE)は代表的自己免疫疾患で全身の臓器を冒し、その病態像は多様である。そのため疾患像の把握が難しく、また、専門家間でも治療方針の決定に難渋することが多い。本研究の目的はSLEの我が国における初めての診療ガイドラインを作成し診療の均てん化に寄与し、エビデンスの蓄積に伴い改訂していくことである。令和2年度から4年度までに2019年に発行されたSLE診療ガイドラインの評価と追補・改訂を開始した。また我が国のSLE患者の診療情報を集積し、将来の臨床・基礎研究に生かすことであり、難病プラットフォームを用いたレジストリを構築し運営を進めている。

抗リン脂質抗体症候群(APS)は血栓症と妊娠合併症を主病態とする希少性疾患でその半数はSLEに合併する。原発性APS(PAPS)はSLEが合併しないものをいう。令和2年度から4年度までに抗リン脂質抗体症候群合併妊娠の診療ガイドライン改訂の準備を本研究班で行った。令和5年度からは、システマティックレビューを行い、ガイドライン推奨文の作成、パネル会議を経てガイドライン発刊を予定している。

A.研究目的

全身性エリテマトーデス(SLE)は代表的自己免疫疾患で全身の臓器を冒し、その病態像は多様である。そのため疾患像の把握が難しく、専門家間でも治療方針の決定に難渋することも多い。本研究ではSLEの我が国における初めての診療ガイドラインの整備・改訂と我が国のSLE患者の臨床データの集積を行うことを目的とする。前者は診療ガイドラインの作成・評価・改訂作業を意味する。ループス腎炎(LN)はSLEの最重要臓器病変であり、ガイドライン発行後も新たな治療エビデンスが蓄積されている。また、我が国でリウマチ専門医と腎臓専門医が独立して診療しているケースがある。両者での診療の均てん化を進め疾患予後を改善するためにLNのガイドライン改訂版を作成する。さらに、医療経済解析も行う。SLE患者の臨床データの集積は疾患レジストリを作成・運営し、将来の臨床・基礎研究に生かすことを目的とする。

抗リン脂質抗体症候群(APS)は血栓症と妊娠合併症を主病態とする希少性疾患で、その半数はSLEに合併する。2015年に抗リン脂質抗体症候群合併妊娠の診療ガイドラインが作成されたが、エビデンスの集積がされていること、新たな検査が保険収載されたことを鑑み、今回本研究班で改訂版を作成する。

B.研究方法

SLE

- ① ガイドライン追補作業：LNについて日本リウマチ学会・日本腎臓学会・日本産婦人科学会合同でガイドライン改訂委員会を編成し文献の集

積・レビューを行う。

- ② 個票改訂：2019年にヨーロッパリウマチ学会(EULAR)/アメリカリウマチ学会(ACR)による新SLE分類基準の我が国における検証作業の結果、従来の分類基準と同等以上の正診断率を確認した。このため、我が国におけるSLE診断にも利用できると判定し、SLEの特定疾患臨床調査個人票を改訂する。
- ③ 疾患レジストリ：厚生労働省難病研究班が日本医療研究開発機構と構築した難病プラットフォームを用いた疾患レジストリシステムを作成する。難病プラットフォームはEDC(electric data capture)を用いた情報統合基盤で、生体試料や臨床情報の二次利用・データシェアリングを通して難病研究を推進させる。
- ④ ループス腎炎治療におけるグルココルチコイド減量スピードによる腎予後の解析について、倫理委員会で承認を得てデータ収集を開始する。
- ⑤ 医療講演会を行い、患者会、学会などを通じた啓もう活動を行う。

PAPS

- ① ガイドラインの改訂作業：ガイドライン委員会を編成し、CQ(clinical question)の作成、システマティックレビューを行い、推奨文を作成する。
- ② 医療講演会を行い、患者会、学会などを通じた啓もう活動を行う。

C.研究結果

SLE

- ① ガイドライン作成委員会を立ち上げ、スコープ・Clinical Question を決定した。またループス腎炎、精神神経ループスについては文献検索が終了し、現在システマティックレビューを行っている。今後推奨文の作成へと進めていく。
- ② 診断基準等について個票の改訂を行った。
- ③ レジストリ項目の設定を行い、運用を開始している。
- ④ 倫理委員会の承認を得て、データ収集まで終了した。現在データ解析を進めている。
- ⑤ 令和5年9月1日から30日にかけてオンデマンドで医療講演会を行った。

PAPS

- ① ガイドライン作成委員会を立ち上げ、CQの作成、システマティックレビューまでが終了した。今後推奨文の作成へと進めていく。
- ② 令和5年9月1日から30日にかけてオンデマンドで医療講演会を行った。

D.考察

我々は2019年に我が国で最初のSLEの診療ガイドラインを作成したが、作成後の作業を継続的に行うことで診療の均てん化と我が国からのエビデンスの創出を行う。即ち、ガイドラインの評価やガイドライン作成時に判明したエビデンス不足領域での新たな臨床研究の設定、そしてそれらの結果も踏まえたガイドラインの改訂である。さらに、SLEのガイドライン改訂版の作成作業に入り、数年内の改訂版公表を行う。疾患レジストリは本班を中心に運営を行い、定期的なデータの解析および公表を行っていく。また、医療講演会を年1回行い、患者会、学会を通じた啓もう活動も進めていく。

抗リン脂質抗体症候群合併妊娠のガイドラインの改訂作業を行なっている。希少疾患であることから、海外のエビデンスも参照することになるが、本邦のエキスパートの知見を組み合わせることで、本邦の実臨床に即した臨床ガイドラインを作成する。

E.結論

SLE、PAPSともに個票の修正を行った。SLEでは診療ガイドラインの改訂作業を進めている。

PAPSでは抗リン脂質抗体症候群合併妊娠の診療ガイドライン改訂の準備も順調に進んでいる。

F.健康危険情報

特記事項無し

G.研究発表

1.論文発表

1. Aso K, Kono M, Abe N, Fujieda Y, Kato M, Atsumi T. Anti-ganglionic nicotinic acetylcholine receptor $\alpha 3$ subunit antibody as a potential biomarker associated with lupus enteritis. *Mod Rheumatol*. 2023 Jan 3;33(1):154-159.
2. Tokushige N, Hayashi Y, Omura J, Jinnai T, Atsumi T. Patient characteristics, diagnostic testing, and initial treatment profiles of patients with connective tissue disease-associated pulmonary arterial hypertension (CTD-PAH) using a Japanese claims database. *Mod Rheumatol*. in press.
3. Tanaka Y, Atsumi T, Okada M, Miyamura T, Ishii T, Nishiyama S, Matsumura R, Kawakami A, Hayashi N, Abreu G, Yavuz S, Lindholm C, Al-Mossawi H, Takeuchi T. The long-term safety and tolerability of anifrolumab for patients with systemic lupus erythematosus in Japan: TULIP-LTE subgroup analysis. *Mod Rheumatol*. Sep 14; road092.2023
4. Arinuma Y., Hasegawa Y., Tanaka T., Matsueda Y., Wada T., Oku K., Yamaoka K. Correlation between soluble TREM2 and anti-GluN2 antibody in lupus patients with diffuse psychiatric/neuropsychological syndromes. *Rheumatology (Oxford)*. 62(4):e105-e106. 2023
5. Ichinose K, Sato S, Igawa T, Okamoto M, Takatani A, Endo Y, Tsuji S, Shimizu T, Sumiyoshi R, Koga T, Kawashiri SY, Iwamoto N, Tamai M, Nakamura H, Origuchi T, Yajima N, Sada KE, Miyawaki Y, Yoshimi R, Shimojima Y, Ohno S, Kajiya H, Sato S, Fujiwara M, Kawakami A. Evaluating the safety profile of calcineurin inhibitors: cancer risk in patients with systemic lupus erythematosus from the LUNA registry-a historical cohort study. *Arthritis Res Ther*. Feb 12;26(1).48. 2024
6. Isojima S, Yajima N, Yanai R, Miura Y, Fukuma S, Kaneko K, Fujio K, Oku K,

- Matsushita M, Miyamae T, Wada T, Tanaka Y, Kaneko Y, Nakajima A, Murashima A. Physician approval for pregnancy in patients with SLE showing only serological activity: A vignette survey study. *Mod Rheumatol*. 27. 49. 2023 May
7. Kaneko S, Shimizu M, Miyaoka F, Shimbo A, Irabu H, Mizuta M, Nakagishi Y, Iwata N, Fujimura J, Mori M, Morio T. The dynamics of laboratory markers reflecting cytokine overproduction in macrophage activation syndrome complicated with systemic juvenile idiopathic arthritis. *Clin Immunol*. 248. 109270. 2023
 8. Kikuchi J, Hanaoka H, Saito S, Oshige T, Hiramoto K, Takeuchi T, Kaneko Y. Deep remission within 12 months prevents renal flare and damage accrual in C12F12 lupus nephritis. *Clin Exp Rheumatol*. Jul;41(7): 1500-1506. 2023
 9. Kikuchi J, Kondo Y, Kojima S, Kasai S, Sakai Y, Takeshita M, Hiramoto K, Saito S, Fukui H, Hanaoka H, Suzuki K, Kaneko Y. Risk of disease flares after SARS-CoV-2 mRNA vaccination in patients with systemic lupus erythematosus. *Immunol Med*. 2024 Jan 8. 2024
 10. Nakajima T, Doi H, Watanabe R, Murata K, Takase Y, Inaba R, Itaya T, Iwasaki T, Shirakashi M, Tsuji H, Kitagori K, Akizuki S, Nakashima R, Onishi A, Yoshifuji H, Tanaka M, Ito H, Hashimoto M, Ohmura K, Morinobu A. Factors associated with osteoporosis and fractures in patients with systemic lupus erythematosus: Kyoto Lupus Cohort. *Mod Rheumatol*. 34(1). 113-121. 2023
 11. Naveen R, Nikiphorou E, Joshi M, Sen P, Lindblom J, Agarwal V, Lilleker JB, Tan AL, Salim B, Ziade N, Velikova T, Edgar Gracia-Ramos A, Kuwana M, Day J, Makol A, Distler O, Chinoy H, Trabocco LS, Kusumo Wibowo SA, Zamora Tehozol EA, Serrano JR, La Torre IG; COVAD Study Group, Aggarwal R, Gupta L, Agarwal V, and Parodis I. Safety and tolerance of vaccines against SARS-CoV-2 infection in systemic lupus erythematosus: results from the COVAD study. *Rheumatology (Oxford)*. 62(7) . 2453-2463. 2023
 12. Sayuri Yamashita, Yasuhiro Katsumata, Naoko Konda, Rangi Kandane-Rathnayake, Eric F Morand, Masayoshi Harigai. Comparisons between US norm-based two-component and Japanese norm-based three-component SF-36 summary scores in systemic lupus erythematosus patients. *Modern Rheumatology*. 33(3). 517-524. 2023
 13. Shimizu M, Nishimura K, Iwata N, Yasumi T, Umebayashi H, Nakagishi Y, Okura Y, Okamoto N, Kinjo N, Mizuta M, Yashiro M, Yasumura J, Wakiguchi H, Kubota T, Mouri M, Kaneko U, Mori M. Treatment for macrophage activation syndrome associated with systemic juvenile idiopathic arthritis in Japan. *Int J Rheum Dis*. 26(5). 938-945. 2023
 14. Tanaka Y, Atsumi T, Okada M, Miyamura T, Ishii T, Nishiyama S, Matsumura R, Hayashi N, Abreu G, Tummala R, Morand EF, Takeuchi T. The efficacy and safety of anifrolumab in Japanese patients with systemic lupus erythematosus: TULIP-2 subanalysis. *Mod Rheumatol*. 33(1). 134-144. 2023
 15. Tanaka Y, Nakayamada S, Yamaoka K, Ohmura K, Yasuda S. Rituximab in the real-world treatment of lupus nephritis: a retrospective cohort study in Japan. *Mod Rheumatol*. 33. 145-153. 2023
 16. Yamada H, Haraguchi A, Tsuru T, Kondo M, Sagawa F, Niino H, Nakashima Y. Low avidity observed for anti-citrullinated peptide antibody is not a general phenomenon for autoantibodies. *Ann Rheum Dis*. 82(12). 1637-1638. 2023
 17. Yamato M, Shirai T, Ishii Y, Sato H, Ishii T, Fujii H. Impact of subcutaneous belimumab on disease activity, patient satisfaction, and metabolic profile in long-lasting systemic lupus erythematosus. *Clin Rheumatol*. 43(3). 1023-1035. 2024
 18. Yamazaki S, Izawa K, Matsushita M, Moriichi A, Kishida D, Yoshifuji H, Yamaji K, Nishikomori R, Mori M, Miyamae T.

Promoting awareness of terminology related to unmet medical needs in context of rheumatic diseases in Japan: a systematic review for evaluating unmet medical needs. Rheumatol Int. 43(11). 2021-2030. 2023

H.知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

2. なし

3. 実用新案登録

なし

4. その他

なし

令和5年度 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業
分担研究報告書

多発性筋炎・皮膚筋炎に関する研究

研究分担者	藤本 学	大阪大学大学院医学系研究科皮膚科学 教授
	川口 鎮司	東京女子医科大学医学部内科学講座膠原病リウマチ内科学分野 臨床教授
	五野 貴久	日本医科大学大学院医学研究科アレルギー膠原病内科学分野 准教授
	小林 一郎	北海道大学大学院医学研究院小児科学教室 客員教授
	神人 正寿	和歌山県立医科大学医学部皮膚科 教授
	杉江 和馬	奈良県立医科大学脳神経内科 教授
	笹井(中嶋) 蘭	京都大学大学院医学研究科内科学講座臨床免疫学 助教
	西野 一三	国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第一部 部長
	室 慶直	名古屋大学医学部附属病院皮膚科 診療教授
	保田 晋助	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科膠原病・リウマチ内科学分野 教授
研究協力者	秋岡 親司	京都府立医科大学大学院医学研究科小児科学 准教授
	植田 郁子	大阪大学大学院医学系研究科皮膚科学 特任講師 (常勤)
	梅澤 夏佳	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科膠原病・リウマチ内科学分野 助教
	沖山奈緒子	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科皮膚科学 教授
	神田 隆	山口大学大学院医学系研究科臨床神経学 教授 (特命)
	岸 崇之	東京女子医科大学小児科 講師
	木村 直樹	東京医科歯科大学膠原病・リウマチ内科 講師
	幸原 伸夫	神戸市立医療センター脳神経内科 参事
	小林 法元	信州大学医学部小児医学教室 特任准教授
	駒形 嘉紀	杏林大学腎臓・リウマチ膠原病内科 教授
	佐藤 慎二	東海大学医学部内科学系リウマチ内科学 教授
	佐藤 亮太	山口大学医学部附属病院脳神経内科 助教
	富満 弘之	JA とりで総合医療センター脳神経内科 院長
	山口 由衣	横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学 教授
	山下 雄太	名古屋大学医学部附属病院皮膚科 医員

研究要旨

厚生労働省本研究班において過去に作成した多発性筋炎/皮膚筋炎 (PM/DM) の診断基準と治療ガイドラインについて、国内外の状況や最新の医学的知見を踏まえて改訂する。2020 年に公開した小児と成人を統合した新しい診断基準と診療ガイドライン (暫定版) を基として、不十分であった診断領域についての内容をさらに充実させ、診断から治療までを包括的に含めた完全版のガイドラインを作成する。完全版のガイドラインは PM/DM 診療ガイドライン 2024 年版 (予定) として刊行予定である。

また PM/DM は特発性炎症性筋疾患 (IIM) に含まれるが、近年の新たな研究結果により海外において IIM の細分類が進んでいる。本邦において PM/DM として難病申請されている患者群は、実際には抗 ARS 抗体症候群 (抗合成酵素症候群)、免疫介在性壊死性ミオパチー (immune mediated necrotizing myopathy; IMNM) と診断される例も本診断基準を満たせば本疾患に含められ、いわば不均一な患者集団であることが推測される。そこで、PM/DM として難病申請されている患者の実態を把握し、最近の海外の動向にあわせて本邦の PM/DM 診断基準をどのように改善していくべきなのかを検討する。

A. 研究目的

多発性筋炎（polymyositis：PM）および皮膚筋炎（dermatomyositis：DM）は、皮膚および筋の炎症性変化を主徴とする自己免疫疾患で、指定難病の一つに含まれている。PM/DMは、希少疾患であるため、本症の診療に習熟していない医師も多いことに加えて、本症はheterogenousな疾患であり、多様な病像を呈し、多診療科にわたる横断的な診療が必要であること、さらには根治的療法がいまだ確立していないことから、その診断および治療にはしばしば困難をとまなうため、標準化された指針が必要である。本研究班において過去に治療ガイドラインを作成した。しかしながら、これらの領域にはめざましい進歩があり、疾患概念、診断、治療などに新しい知見が数多く報告されてきている。

PM/DMの診療の標準化、医療の質の向上、患者のQOLの改善を目指すために、治療ガイドラインの改訂を行い、2020年度に「暫定版」として完成し、本研究班のウェブサイト上に公開している。この「暫定版」では、治療に関する領域に比較して、主に診断に関する領域については総論においてカバーしてはいるものの、個別のクリニカルクエスション（CQ）が不足していた。そこで本症に対して診断から治療までCQを漏れなく扱う「完全版」のガイドライン作成し、公開を予定している。

またPM/DMは特発性炎症性筋疾患（IIM）に含まれるが、近年の新たな研究結果により海外においてIIMの細分類が進んでいる。本邦において2020年にPM/DM診断基準が改訂され、PM、DMおよびADM、JDM、若年性多発性筋炎（Juvenile PM; JPM）に関する診断項目が示されている。しかしながら、PM/DMの診断で難病申請される患者群の中には、抗ARS抗体症候群（抗合成酵素症候群）、免疫介在性壊死性ミオパチー（immune mediated necrotizing myopathy; IMNM）と診断される例も本診断基準を満たせば、本疾患に含まれており、PM/DMとして難病申請される。したがってPM/DMとして難病申請されている患者群は、いわば不均一な患者集団であると推測される。以前はこれらの患者は皮膚症状があればDM、皮膚症状がなければPMと診断していたが、最

近の研究により、PMと診断されていた患者の多くが抗合成酵素抗体症候群やIMNMであると考えられており、PMと診断される症例自体がかなり少なくなり、PMという疾患概念自体の見直しが必要であることが指摘されている。そこで本邦におけるPM/DMとして難病申請されている患者の実態を把握し、最近の海外の動向にあわせて本邦のPM/DM診断基準をどのように改善していくべきなのかを検討する必要がある。

B. 研究方法

PM/DM診療ガイドラインについては、前PM/DM分科会研究班において、暫定版に含まれるシステマティックレビューを行うCQはそのまま残しながら、新しいエビデンスを検索して、アップデートを行った。また診療に重要なCQに含められていなかった内容で、新たに作成すべきものを、脳神経内科、膠原病・リウマチ内科、小児科、皮膚科のそれぞれの領域で討議してあらかじめリストアップした上で、分科会全体で議論を行い、取捨選択を行った。これらに関して、日本医学図書館協会の協力を得て、PubMed、Cochrane Libraryをデータベースとした2020年暫定版以降の2018年～2021年3月の文献検索を行ったうえで、システマティックレビューを行い推奨文・解説文の改訂を行った。システマティックレビューを行ったCQおよび診療に重要なCQについて、推奨文・推奨度の決定は修正デルファイ法に基づいて行い、推奨の強さ・合意度を示した。診療ガイドラインの草案の作成は完了しており、日本リウマチ学会、日本神経学会、日本皮膚科学会、日本小児リウマチ学会に依頼し、パブリックコメントを回収した。これらのコメントに対する対応を検討の上、今後学会承認を得てPM/DM診療ガイドライン（2024年版）として刊行予定である。

またPM/DMとして難病指定されている患者の実態調査については、「多施設共同研究によるPM/DMとして難病申請されている患者の実態把握」として倫理審査委員会に諮り承認を得る。承認が得られたのち、国内の多施設において、2021年1月1日～2023年12月31日にPM/DMとして新規に難病申請した患者を後ろ向きに、診断名、診断基準内の項目で満たしている項目、自己抗体などの臨床情報を収集し解析する。

(倫理面への配慮)
特記すべきことなし。

C. 研究結果

暫定版からある CQ は主に治療に関連しており、完全版では診断に関わる項目（検査・鑑別診断・症状、予後）を主に追加した。既存の回答文のクリティカルレビューによる改訂、および新規クリニカルクエスチョンに対する回答文の作成とそのクリティカルレビューを行い、草案が完成した。また適宜小児に関連する新たな知見を追加した。分科会内で合意度に対する投票を行った上で、班全体での議論を行い決定した。各学会での承認などの手続きを経て、2024 年版としての完成を目指している。

難病指定患者の実態調査をどのように行うかを、具体的な調査方法や調査内容について議論をすすめた。多施設共同研究としての研究計画書の作成を開始しており、今後大阪大学倫理審査委員会に諮り承認を得る予定である（資料 1）。

D. 考 察

2020年に改訂・公開したPM/DMの診療ガイドラインは「暫定版」ではあったが、今回の改訂は大幅にCQ数も増加し、診断から治療まで漏れなく扱うことによって、より充実した内容となるため、本症に関わる医療従事者にとって、より利便性の高いガイドラインとなることが期待できる。一方で、PM/DMという希少疾患においては質の高いエビデンスが決定的に不足していることは変わらず、今後本邦においては本研究班を中心に難病プラットフォームなども通じてエビデンスの創出に向けて努力していく必要があると考えられた。

PM/DM として難病指定されている患者の実態調査を行うことにより得られる結果は、海外の最近の動向にあわせて、今後本邦の PM/DM 診断基準をどのように改善していくべきなのかという方向性を検討するために重要な資料となりうることが期待される。

E. 結 論

PM/DM の「完全版」ガイドラインの原案が完成した。種々の手続きを経て、PMDM 診療ガイドライン（2024 年版）として刊行予定である。

多施設共同により PM/DM として難病指定されて

いる患者の実態調査を行い、海外の最近の動向にあわせて本邦の PM/DM 診断基準をどのように改善していくべきなのかという今後の方向性を検討する。

F. 健康危険情報

特になし。

G. 研究発表

1. 論文発表

1. Fujimoto M. A combination of autoantibodies predicts the fate of cancer-associated dermatomyositis. *Arthritis Rheumatol* 2023.
2. Tanboon J, Inoue M, Hirakawa S, Tachimori H, Hayashi S, Noguchi S et al. Muscle pathology of antisynthetase syndrome according to antibody subtypes. *Brain Pathol* 2023:e13155.
3. Ueda-Hayakawa I, Tonomura K, Maekawa A, Kaneda E, Arase N, Fujimoto M. Age distribution and prevalence in different age groups of four myositis-specific autoantibodies, including anti-ARS, anti-MDA5, anti-Mi-2, and anti-TIF1γ antibodies. *J Dermatol* 2023.
4. Ueda-Hayakawa I, Maekawa A, Tonomura K, Kaneda E, Yamazaki Y, Arase N, Fujimoto M. Association between periungual changes and myositis-specific autoantibodies in patients with idiopathic inflammatory myopathies: A retrospective cohort study. *J Am Acad Dermatol* 2024 in press
5. Connolly CM, Gupta L, Fujimoto M, Machado PM, Paik JJ. [Idiopathic inflammatory myopathies: current insights and future frontiers](#). *Lancet Rheumatol*. 2024

2. 学会発表

(発表誌名巻号・頁・発行年等も記入)

特になし。

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

5. 特許取得

特になし。

6. 実用新案登録

特になし。

7. その他

特になし。

課題名：多施設共同による多発性筋炎/皮膚筋炎として難病申請されている
患者の実態把握

研究実施計画書（案）

0 概要

項目	内容
目的	本邦における多発性筋炎/皮膚筋炎（PM/DM）として難病申請されている患者の実態を明らかにする。
対象	国内の PM/DM の診療拠点である多施設において、2021 年 1 月 1 日～2023 年 12 月 31 日に PM/DM として新規に難病申請した患者
予定参加者数	約 200 例
研究概要	国内の多施設において、該当患者を後ろ向きに、診断名、診断基準内の項目で満たしている項目、自己抗体などの臨床情報を収集する
実施予定期間	研究機関の長の許可日～ 2029 年 3 月 31 日

1 研究の実施体制

研究代表者

大阪大学大学院医学系研究科 皮膚科学教室 藤本 学

研究分担者

大阪大学大学院医学系研究科 皮膚科学教室 植田 郁子

解析責任者

大阪大学大学院医学系研究科 皮膚科学教室 藤本 学

共同研究機関及び研究責任者

東京女子医科大学医学部内科学講座膠原病リウマチ内科学分野 川口 鎮司

日本医科大学大学院医学研究科アレルギー膠原病内科学分野 五野 貴久

北海道大学大学院医学研究院小児科学教室 小林 一郎

和歌山県立医科大学医学部皮膚科 神人 正寿

奈良県立医科大学脳神経内科 杉江 和馬

京都大学大学院医学研究科内科学講座臨床免疫学 笹井（中嶋）蘭

国立精神・神経医療研究センター神経研究所疾病研究第一部 西野 一三

名古屋大学医学部附属病院皮膚科 室 慶直

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科膠原病・リウマチ内科学分野 保田 晋助

京都府立医科大学大学院医学研究科小児科学 秋岡 親司

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科膠原病・リウマチ内科学分野 梅澤 夏佳

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科皮膚科学 沖山 奈緒子
山口大学大学院医学系研究科臨床神経学 神田 隆
東京女子医科大学医学部小児科学 岸 崇之
東京医科歯科大学膠原病・リウマチ内科 木村 直樹
神戸市立医療センター脳神経内科 幸原 伸夫
信州大学医学部小児医学教室 小林 法元
杏林大学腎臓・リウマチ膠原病内科 駒形 嘉紀
東海大学医学部内科学系リウマチ内科学 佐藤 慎二
山口大学医学部附属病院脳神経内科 佐藤 亮太
JA とりで総合医療センター神経内科 富満 弘之
横浜市立大学大学院医学研究科環境免疫病態皮膚科学 山口 由衣
名古屋大学医学部附属病院皮膚科 山下 雄太

2 研究の目的及び意義

国内の PM/DM の診療拠点である多施設において、PM/DM として難病申請されている患者の実態を明らかにする。

3 背景(研究の科学的合理性の根拠)

筋炎は自己組織に対して過剰な免疫応答が生じる結果、筋肉、皮膚、関節、肺などに炎症を来す膠原病の一種である。

2017 年に EULAR/ACR の国際分類基準が報告され、特発性炎症性筋疾患 (Idiopathic inflammatory myopathy; IIM) は PM、皮膚筋炎 DM、無筋症性皮膚筋炎 (Amyopathic DM; ADM)、封入体筋炎 (Inclusion body myositis; IBM)、若年性皮膚筋炎 (Juvenile DM; JDM)、JDM 以外の若年性筋炎の 6 つに分類された。さらに IIM の中で免疫介在性壊死性ミオパチー (Immune mediated necrotizing myopathy; IMNM) や抗合成酵素抗体症候群 (Anti-synthetase syndrome; ASS) が病態の異なる一群として認識されている。

一方、本邦においては 2020 年に PM/DM 診断基準が改訂され、PM、DM および ADM、JDM、若年性多発性筋炎 (Juvenile PM; JPM) に関する診断項目が示されているが、抗 ARS 抗体症候群 (抗合成酵素症候群)、免疫介在性壊死性ミオパチーと診断される例も、本診断基準を満たせば本疾患に含められ、PM/DM として難病申請されている。したがって PM/DM として難病申請されている患者群は、PM/DM 以外に IIM に含まれるが、実際には PM/DM 以外の患者を含む、いわば不均一な患者集団である。また以前はこれらの患者は皮膚症状があれば DM、皮膚症状がなければ PM と診断していたが、最近の研究により、PM という疾患概念自体の見直しが必要であることが指摘されており、近年では PM と診断される症例自体がかなり少なくなっている。

本邦における PM/DM として難病申請されている患者の実態を把握することにより、海

外の最近の動向にあわせて、本邦の PM/DM 診断基準をどのように改善していくべきなのかという今後の方向性を検討する。

4 研究の方法

(1) 研究の種類・デザイン

後ろ向き観察研究

国内の PM/DM の診療拠点である多施設において、2021 年 1 月 1 日～2023 年 12 月 31 日に PM/DM として新規に難病申請した患者を対象とする。

(2) 方法

本研究は厚生労働省の難治性疾患政策研究事業「自己免疫性疾患に関する研究」分科会である PMDM 班の分担研究として、研究分担者の所属施設で行う多施設共同研究である。

1. PM/DM として新規に難病申請した患者を対象とし、一次調査（患者数の把握、臨床診断名、筋炎関連自己抗体）と二次調査（臨床像の把握）の二部から構成される。

2. 観察・測定項目とその実施方法（スケジュールも含む）

①患者背景：診断時年齢、現在の年齢、性別

②診断

臨床診断名（DM、CADM、PM、ASyS、IMNM、IBM、オーバーラップ症候群、JDM、JPM、JDM または JPM 以外の筋炎、その他）

③臨床症状の有無（診断時もしくは最重症時）

全身炎症所見（発熱）

皮膚症状（ヘリオトロープ疹、ゴットロン徴候、ゴットロン丘疹、掌の丘疹、メカニックスハンド、V徴候、ショール徴候、四肢伸側の紅斑、脱毛、多形皮膚萎縮、爪上皮出血点、爪囲紅斑、皮膚潰瘍、脂肪織炎、レイノー現象）

筋症状（上下肢筋力低下、嚥下障害、筋肉の自発痛、把握痛）

関節症状（関節炎又は関節痛）

間質性肺疾患（筋症状出現時期との比較、発症形式）

悪性腫瘍（悪性腫瘍の種類）

筋炎以外の膠原病の合併

④検査所見（診断時もしくは最重症時）

筋炎関連自己抗体（抗Jo-1抗体、抗ARS抗体、抗MDA5抗体、抗Mi-2抗体、抗TIF1- γ 抗体、抗NXP-2抗体、抗SAE抗体、抗SRP抗体、抗HMGR抗体）および測定方法

血液検査（CRP、赤沈、CK、アルドラーゼ、ミオグロビン、AST、ALT、LDH、KL-6、SP-D、LDH）

皮膚生検（角質増加、表皮萎縮、基底層の液状変性、表皮異常角化細胞、組織学的色素失調、血管周囲性の炎症細胞浸潤、真皮の浮腫、ムチン沈着、脂肪織炎あるいは脂

肪変性、石灰沈着)

筋生検で筋炎の病理所見の有無(筋内鞘(endomysium)における筋線維侵入を伴わない筋線維周囲の単核球浸潤、筋周鞘(perimysium)または血管周囲の単核球浸潤、筋束辺縁部萎縮、縁取り空胞、

MHC-I/MHC-II/p62/TDP43/MAC/MxA/MHCn/CD8/CD3/CD4/CD20/CD68の染色による評価結果、筋線維膜に補体沈着(MAC、C5b-9)の発現)

⑤画像所見(診断時もしくは最重症時)の有無

針筋電図で筋炎を示す変化の有無

MRIで筋炎の所見の有無

間質性肺炎の有無、およびその重症度、急速進行性/亜急性/慢性

悪性腫瘍の有無、癌腫

⑥既治療 ステロイド、ステロイド最大投与量、ステロイドパルス、免疫抑制剤およびその種類(IVCY、Tac、MMFなど) リツキシマブ、トシリズマブ、JAK阻害薬、HCQ、IVIG

⑦転帰 死亡/生存

これらの観察測定項目は、診療のために得られた既存情報であり、当該研究のためではない。

実施スケジュールとしては、まず一次調査において、患者数、臨床診断名、筋炎関連自己抗体(抗Jo-1抗体、抗ARS抗体、抗MDA5抗体、抗Mi-2抗体、抗TIF1- γ 抗体、抗NXP-2抗体、抗SAE抗体、抗SRP抗体、抗HMGR抗体)とその測定方法について回収する。つづいて二次調査では個々の症例における臨床像の把握のため、臨床症状、各種検査所見、画像所見、既治療、転帰の情報を回収する。

(3) 情報の提供の有無

大阪大学皮膚科のデータ管理者は各共同研究施設より既存情報の提供を受ける。

4.1 研究デザイン

該当なし。

4.2 対象(研究対象者の選定方針)

【選択基準】

以下の基準をすべて満たす患者を対象とする。

- ① 年齢：不問。
- ② 性別：不問。
- ③ 入院/外来：不問。

- ④ 国内のPM/DMの診療拠点である多施設において、2021年1月1日～2023年12月31日にPM/DMとして新規に難病申請した患者を対象とする。

【除外基準】

以下のうち一つでも該当する患者は、対象として除外する。

- ① 研究責任者または研究分担者が研究対象者として不適当と判断した患者。
- ② 本研究への患者登録拒否を申し出た患者。
- ③ 既に他施設や他診療科で登録された患者

予定症例数及びその設定根拠

200例

各施設から5～10例程度の症例に関する情報の回収を予定している。

4.3 観察・調査項目

(1) 観察・測定項目とその実施方法（スケジュールも含む）

①患者背景：診断時年齢、現在の年齢、性別

②診断

臨床診断名（DM、CADM、PM、ASyS、IMNM、IBM、オーバーラップ症候群、JDM、JPM、JDMまたはJPM以外の筋炎、その他）

③臨床症状の有無（診断時もしくは最重症時）

全身炎症所見（発熱）

皮膚症状（ヘリオトロープ疹、ゴットロン徴候、ゴットロン丘疹、掌の丘疹、メカニックハンド、V徴候、ショール徴候、四肢伸側の紅斑、脱毛、多形皮膚萎縮、爪上皮出血点、爪囲紅斑、皮膚潰瘍、脂肪織炎、レイノー現象）

筋症状（上下肢筋力低下、嚥下障害、筋肉の自発痛、把握痛）

関節症状（関節炎又は関節痛）

間質性肺疾患（筋症状出現時期との比較、発症形式）

悪性腫瘍（悪性腫瘍の種類）

筋炎以外の膠原病の合併

④検査所見（診断時もしくは最重症時）

筋炎関連自己抗体（抗Jo-1抗体、抗ARS抗体、抗MDA5抗体、抗Mi-2抗体、抗TIF1- γ 抗体、抗NXP-2抗体、抗SAE抗体、抗SRP抗体、抗HMGR抗体）および測定方法

血液検査（CRP、赤沈、CK、アルドラーゼ、ミオグロビン、AST、ALT、LDH、KL-6、SP-D、LDH）

皮膚生検（角質増加、表皮萎縮、基底層の液状変性、表皮異常角化細胞、組織学的色素失調、血管周囲性の炎症細胞浸潤、真皮の浮腫、ムチン沈着、脂肪織炎あるいは脂肪変性、石灰沈着）

筋生検で筋炎の病理所見の有無（筋内鞘（endomysium）における筋線維侵入を伴わな

い筋線維周囲の単核球浸潤、筋周鞘（perimysium）または血管周囲の単核球浸潤、筋束辺縁部萎縮、縁取り空胞、

MHC-I/MHC-II/p62/TDP43/MAC/MxA/MHCn/CD8/CD3/CD4/CD20/CD68の染色による評価結果、筋線維膜に補体沈着（MAC、C5b-9）の発現）

⑤画像所見（診断時もしくは最重症時）の有無

針筋電図で筋炎を示す変化の有無

MRIで筋炎の所見の有無

間質性肺炎の有無、およびその重症度、急速進行性/亜急性/慢性

悪性腫瘍の有無、癌腫

⑥既治療 ステロイド、ステロイド最大投与量、ステロイドパルス、免疫抑制剤およびその種類（IVCY、Tac、MMFなど）リツキシマブ、トシリズマブ、JAK阻害薬、HCQ、IVIg

⑦転帰 死亡/生存

これらの観察測定項目は、診療のために得られた既存情報であり、当該研究のためではない。

(2) 情報の提供の有無

大阪大学皮膚科のデータ管理者は各共同研究施設より既存情報の提供を受ける。

4.4 評価項目

主要評価項目 (Primary endpoint)

- ・ 本邦の診断基準項目における陽性頻度
- ・ 海外の分類基準項目における陽性頻度
- ・ 筋炎関連自己抗体の種類
- ・ 臨床診断

副次的評価項目 (Secondary endpoint)

- ・ 臨床的な合併症の頻度や重症度、種類、検査所見

安全性評価項目

本研究は既存の試料や情報を用いた研究のため該当せず

5 研究期間

研究機関の長の許可日 ～ 2029 年 3 月 31 日

6 インフォームド・コンセントを受ける手続等

本研究は情報のみの提供を受けること、また個人を識別することができない状態で提供を受けるため、個別的なインフォームド・コンセントを省略する。

本研究は既存情報のみを用いた研究のため、研究の実施について、以下の情報を、研究対象者等に公開して、研究対象者等が参加することを拒否できるようにする。情報の公開は実施施設のホームページにて行う。

- ① 情報の利用目的及び利用方法（他の機関へ提供される場合はその方法を含む。）
- ② 利用し、又は提供する情報の項目
- ③ 利用又は提供を開始する予定日
- ④ 情報の提供を行う機関の名称及びその長の氏名
- ⑤ 提供する情報の取得の方法
- ⑥ 提供する情報を用いる研究に係る研究責任者（多機関共同研究にあつては、研究代表者）の氏名及び当該者が所属する研究機関の名称
- ⑦ 利用する者の範囲
- ⑧ 情報の管理について責任を有する者の氏名又は名称
- ⑨ 研究対象者等の求めに応じて、研究対象者が識別される情報の利用又は他の研究機関への提供を停止する旨
- ⑩ ⑨の研究対象者等の求めを受け付ける方法

7 代諾者等からインフォームド・コンセントを受ける場合の手続

該当しないため記載省略

7.1 代諾者等の選定方針

該当しないため記載省略

8 インフォームド・アセントを得る場合の手続

該当しないため記載省略

9 個人情報等の取扱い(加工する場合にはその方法、仮名加工情報又は匿名加工情報を作成する場合にはその旨を含む。)

研究対象者のデータや検体から氏名等の特定の個人を識別することができることとなる記述等を削り、代わりに新しく符号又は番号をつけて加工する。研究対象者とその符号（番号）を結びつける表を自機関で作成し、個人情報管理者は外部に漏れないように厳重に保管する。受渡しは、特定の個人を識別することができない状態で取り扱う。

安全管理措置

物理的安全管理（データ管理PCは研究室内の保管庫にて鍵をかけて保管、記録媒体の持ち出し禁止等、盗難等・漏えい等の防止、個人データの削除及び機器、電子媒体等の廃棄）、技術的安全管理（データ管理PCへのアクセス制御、外部からの不正アクセス等の防止に対して不正ソフトウェア対策）、組織的安全管理（個人情報の取扱いの制限と権限を研究責任者と研究分担者に限定する）、人的安全管理（定期的に教育を受ける）を行う。

10 研究対象者に生じる負担並びに予測されるリスク及び利益、これらの総合的評価並びに当該負担及びリスクを最小化する対策

予想される利益

本研究は既存の情報を用いた研究であり、研究対象者に経済上の利益はない。研究成果により将来の医療の進歩に貢献できる可能性がある。

予想される不利益及びそれらを最小化する対策

本研究で行われる検査などは全て日常診療の一環として行われるものである。本研究は既存の試料や情報を用いた研究であり、本研究の対象者となることによる負担やリスクは生じないと考えられる。

予測される副作用/合併症

本研究は既存の情報を用いた研究のため該当せず

11 情報（研究に用いられる情報に係る資料を含む。）の保管及び廃棄の方法

11.1 情報の保管及び廃棄の方法

研究責任者、研究分担者、データ管理者は、本研究の実施に係る記録（文書及び電子記録）を、本研究結果の最終の公表について報告された日から10年間、漏えい、混交、盗難、紛失等が起こらないよう必要な管理を行い適切に保管する。

保存期間終了後の情報の破棄について紙媒体は細断し焼却する。

11.2 試料・情報の授受に関する記録の作成・保管

11.2.1 「試料・情報の提供に関する記録」を作成する方法

必要事項が記載された「研究計画書」を提供記録とする

11.2.2 「試料・情報の提供に関する記録」を保管する方法

提供元の機関においては、当該試料・情報の提供をした日から3年を経過した日まで

の期間、提供先の機関においては、当該研究の終了について報告された日から5年を経過した日までの期間保管する。

12 将来の研究のために用いられる可能性又は他の研究機関に提供する可能性

将来PM/DM臨床像を明らかにするため、本研究で得られた情報を二次利用する可能性がある。その場合は改めて倫理審査委員会で承認を受けた上で使用する。

13 研究機関の長への報告内容及び方法

研究者等は当該研究機関のルールに則り、以下の報告を行う。

- ・ 本研究の進捗状況
- ・ 研究計画書からの逸脱
- ・ 研究計画書の変更
- ・ 研究終了の報告

14 研究の資金源等

本研究は既存の情報を用いた研究のため、特別な研究資金は発生しない。事務的作業などに費用が発生する場合は、厚生労働科研の研究費を利用して実施する。

15 研究機関の研究に係る利益相反及び個人の収益等、研究者等の研究に係る利益相反に関する状況

研究機関の研究責任者、研究者が本研究に関わる利益相反に関して申告が必要な場合、当該研究者が所属する各研究機関が設けた規程等に基づき、利益相反の管理を行う。

16 研究に関する情報公開の方法

研究成果は、研究対象者を特定できないようにした上で、学会や学術雑誌等で公表する。公開データベースに登録しない。

17 研究により得られた結果等の取扱い

本人の希望に応じて、口頭、文書にて説明する。

18 研究対象者等及びその関係者が研究に係る相談を行うことができる体制及び相談窓口(遺伝カウンセリングを含む。)

該当しないため記載省略

19 研究対象者等に経済的負担又は謝礼がある場合には、その旨及びその内容

該当しないため記載省略

20 侵襲を伴う研究の場合には、重篤な有害事象が発生した際の対応

該当しないため記載省略

21 侵襲を伴う研究の場合には、当該研究によって生じた健康被害に対する補償の有無及びその内容

該当しないため記載省略

22 研究対象者への研究実施後における医療の提供に関する対応

該当しないため記載省略

23 研究に関する業務の一部を委託する場合の業務内容及び委託先の監督方法

該当しないため記載省略

24 モニタリング及び監査を実施する場合には、その実施体制及び実施手順

モニタリング

該当しないため記載省略

監査

該当しないため記載省略

25 研究計画書の承認(多機関共同研究の場合)

大阪大学医学部附属病院の倫理審査委員会で一括審査を行い、承認を得る。

令和5年度 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業
分担研究報告書

混合性結合組織病（MCTD）に関する研究

○研究分担者

（分科会長）

研究分担者

田中 良哉 産業医科大学医学部第1内科学講座 教授
伊藤 保彦 日本医科大学付属病院 リウマチ膠原病内科 教授
亀田 秀人 東邦大学医療センター大橋病院膠原病リウマチ科 教授
桑名 正隆 日本医科大学付属病院 リウマチ膠原病内科 教授
藤井 隆夫 和歌山県立医科大学リウマチ・膠原病科学講座 教授
藤尾 圭志 東京大学医学部アレルギーリウマチ内科 教授

室 慶直 古屋大学医学部皮膚科学 診療教授

研究協力者

赤松このみ 藤田医科大学 医学部 リウマチ・膠原病内科 助教
大村浩一郎 神戸市立医療センター中央市民病院 膠原病・リウマチ内科 部長
小倉 剛久 東邦大学 医学部内科学講座 膠原病学分野 講師
神田友梨恵 産業医科大学病院 膠原病リウマチ内科 修練指導医
白井悠一郎 日本医科大学大学院医学研究科アレルギー膠原病内科学分野 講師
田淵 裕也 京都大学 大学院医学研究科内科学講座 臨床免疫学 医員
土田 優美 大学 医学部 アレルギーリウマチ内科 助教
中山田真吾 産業医科大学 医学部 第1内科学講座 准教授
檜崎 秀彦 日本医科大学 小児科 准教授
長谷川久紀 東京医科歯科大学大学院膠原病リウマチ内科学分野 講師
平田信太郎 広島大学病院 リウマチ・膠原病科 教授
平野 大介 藤田医科大学 医学部 リウマチ・膠原病内科 講師
深谷 修作 藤田医科大学 医学部 リウマチ・膠原病内科 准教授
松宮 遼 和歌山県立医科大学 医学部 リウマチ・膠原病科学講座 助教
安岡 秀剛 藤田医科大学 医学部 リウマチ・膠原病内科 教授
山下 雄太 名古屋大学医学部附属病院 皮膚科 医員

研究要旨

混合性結合組織病(MCTD; 指定難病52)は、令和3年度には10009名が登録された代表的な全身性自己免疫疾患の一つである。本分科会では、「混合性結合組織病(MCTD)改定診断基準2019」を策定、Modern Rheumatology(31巻29-33頁, 2021年)に公表した。それを基にして、「混合性結合組織病診療ガイドライン2021」を作成して発刊し、2022年4月からMindsガイドラインライブラリにて一般公開された。診断基準、重症度分類と共に、本ガイドラインに関してもさらなる検討の継続を要すると考えられ、難病プラットフォームを活用し、世界に比類を見ない重要な臨床情報の蓄積を目指し、診断基準、重症度分類の改定も含めた将来に向けた基盤づくりを着実に実施することが確認された。また、抗SMN抗体が客観的な重症度バイオマーカーとなるポテンシャルを有しており、多施設研究によって検証することの重要性が指摘された。

A. 研究目的

混合性結合組織病(MCTD; 指定難病 52)は、令和 3 年度には 10009 名が登録された代表的な全身性自己免疫疾患の一つである。本分科会では、「混合性結合組織病(MCTD)改定診断基準 2019」を策定、Modern Rheumatology(31 巻 29-33 頁, 2021 年)に公表した。典型的な MCTD 症例と境界領域症例の検討を基に本疾患の定義、診断基準を再考し、混合性結合組織病の概念、共通所見、免疫学的所見、特徴的な臓器障害を冒頭に記載することにより、本疾患の全体像を捕らえやすくした。また、国際的に標準化された GRADE 法に準拠し、エビデンスに基づいた、「混合性結合組織病(MCTD)診療ガイドライン 2021」を発刊し、Minds から公表された。これらの成果をもとに、令和 5-7 年度は渥美達也班長からの指示に従い、1) 難病プラットフォームレジストリーの登録促進、2) 臨床個人調査票・難病プラットフォームレジストリーなどを活用した疫学評価、3) 診療ガイドライン・診断基準の改定、4) 社会啓発活動の推進を、3 カ年計画として進めていくことを主要な目的としている。

B. 研究方法

上記の令和 5-7 年度以降の活動目標を踏まえて、令和 5 年度の混合性結合組織病分科会では、1. 難病プラットフォームによるレジストリーの登録促進、2. 難病プラットフォームや臨床個人調査票を用いた疫学調査の提案、3. 1,2 に基づく重症度分類の改定、4. 1,2 に基づく診療ガイドラインの改定の如何について、5. 1,2 に基づく診断基準の検証について、6. 抗 SMN 抗体など重症度の客観的指標の検討について(多施設研究、AMED 研究)、7. 患者会、学会などを通じた啓発活動、8. その他(医療講演会の案内)を挙げて、活動方針とした。(倫理面への配慮)

臨床検体を使用する場合には、所属機関の倫理委員会、或は、IRB で承認を得た研究に限定し、患者からインフォームドコンセントを得た上で、倫理委員会の規約

を遵守し、所属機関の現有設備を用いて行なった。患者の個人情報が所属機関外に漏洩せぬよう、試料や解析データは万全の安全システムをもって厳重に管理し、人権擁護に努めると共に、患者は、経済的負担を始め如何なる不利益や危険性も被らない事を明確にした。

C. 研究結果

1. 難病プラットフォームによるレジストリーの登録促進

患者登録をより一層促進し体系的な疫学的調査のデータベース構築を進めていく方針とし、全協力施設に対して新規症例だけでなく、既存診断症例についても登録を進めていくこととした。また、混合性結合組織病診断基準の検証については、難病プラットフォームプロジェクトに参加している他の自己免疫疾患分科会とも連携する必要があり、混合性結合組織病症例に限らず他疾患の症例登録についても推進していく必要性が強調された。

2. 難病プラットフォームや臨床個人調査票を用いた疫学調査の提案

難病プラットフォームを活用した今後の混合性結合組織病分科会活動計画として、難病プラットフォーム調査票で用いている本疾患特有収集項目を活用した疫学的調査、混合性結合組織病の診断基準のみを満たす症例での GWAS 解析、他の自己免疫疾患との比較とそれらを用いた診断基準の検証、自己抗体・地域別・高齢者などの臨床情報に基づくサブ解析と病態・臨床への意義付けなどに関する検証が挙げられた。一方、難病プラットフォームの症例数増加には時間を要するため、まず臨床個人調査票を利用して改定診断基準のバリデーション、治療内容の評価を進めることとした。また、疾患予後評価に対する疫学的調査が長期間更新されておらず、混合性結合組織病分科会施設での疾患予後調査を検討することとした。

3. 1,2 に基づく重症度分類の改定

4. 1,2 に基づく診療ガイドラインの改定

5. 1,2 に基づく診断基準の検証

新しい診断手引きが発行され 3 年経過するが、エビデンスレベルは低い現状であり改定の如何について検討を要する。しかし、依然エビデンスが少なく、重症度分類・診療ガイドラインいずれも変更点に欠けるため現時点での更新の必要性は低いという意見が多数であった。今後、分科会で予後調査を含めた現状評価を行なった上で改定を検討する方針となった。診断基準の検証については、臨床個人調査票を利用した疫学的評価を行う方針となった。また、現在使用されている臨床個人調査票が旧診断基準・旧重症度分類であり、厚生労働省に更新を依頼する方針となった。また、これらが更新されるまでは実態調査もできず、改訂作業に入る意義が制約されるとされた。

6. 抗 SMN 抗体など重症度の客観的指標の検討

混合性結合組織病の死因の約 60%を肺動脈性肺高血圧症、呼吸不全、心不全など心肺障害が占め、本疾患の重症度と予後を規定する病態である。産業医科大学第 1 内科講座では、抗 SMN complex 抗体が重症度の客観的指標となる可能性を示した。SMN (Survival of motor neuron) は脊髄性筋萎縮症の原因遺伝子で、抗 SMN 抗体は抗 U1RNP 抗体としばしば併存し、混合性結合組織病に特異性が高い。また、抗 SMN 抗体は肺高血圧症や間質性肺疾患などの臓器障害や死亡と有意な関連性が示された。以上より、抗 SMN 抗体は重症度の客観的指標としてのポテンシャルを有するが、検討症例数を増やして検証する必要がある。そこで、混合性結合組織病分科会において、試料提供については本症例のバイオレポジトリを有する施設より必要な手順を踏んだ上で、保管血清検体・臨床情報を提供し、多施設共同研究を進める方針となった。また現在免疫沈降法での測定を行なっているが、臨床への応用にあたり ELISA 測定方法の構築を検討しており、技術開発について企業と連携し検討を進める方針となった。

7. 患者会、学会などを通じた啓発活動

8. その他(医療講演会の案内)

令和 3-4 年には自己免疫疾患研究班全体で Web を

通じた市民公開の医療講演会を実施した。令和 5 年度も、混合性結合組織病分科会からは、田中良哉、亀田秀人、桑名正隆の 3 名が本疾患について講演を行った。一方、自己免疫研究班の HP の充実とともに、患者が最も見るとされる難病情報センターの HP の改定が急務である。

D. 考察

難病プラットフォーム登録患者の対象は新規混合性結合組織病診断例から開始するが、難病申請を取得していない軽症例も積極的に登録し、将来的に診断基準への反映も検討される旨が提案された。診断基準の検証については、本プロジェクトに参加している他の自己免疫疾患分科会とも連携する必要があるとあり、現段階では自己免疫班に参加していない強皮症分科会の参加も促す必要がある点が指摘された。一方、難病プラットフォームを活用した今後の研究計画については、第 1 に、共通所見、免疫学的所見、特徴的な臓器所見、混合所見の発生率などの疫学的調査、本疾患診断基準のみを満たす症例での GWAS 解析、全身性エリテマトーデス/全身性強皮症/特発性炎症性筋疾患などの他疾患との比較とそれらを用いた診断基準の検証、自己抗体、地域別、高齢者などの臨床情報に基づくサブ解析と病態・臨床への意義付けが必要であるとした。第 2 に、着実に経過を追って記載することにより、各症例における病態の変化、小児期から成人期への移行期医療の検討が可能となり、有意義な研究につながることも確認された。第 3 に、分科会から登録を開始し、自己免疫班、さらに全国の機関施設へと広げていくことで、世界に比類を見ない臨床情報が蓄積するはずであり、将来に向けた基盤づくりを実施することが確認された。そのためにも、本分科会の難病プラットフォーム登録可能施設の増加、さらに他疾患との連携も広げていくことを検討した。

一方、混合性結合組織病の主死因は肺動脈性肺高血圧症、呼吸不全、心不全など心肺系の死因が全体の 60%を占め、本疾患の生命予後を規定するため積極的な治療介入を要する。これらを伴なえば、重症度が高くなく、予後が比較的良い症例も少なくない。本分科会

では、重症度分類を公表しているが、エビデンスに基づいた改訂を検討中である。混合性結合組織病の約40%に特徴的に検出される抗SMN抗体陽性者の約80%は、肺動脈性肺高血圧症や間質性肺疾患を併発する重症例に該当し、生命予後が悪いことを報告してきた。測定方法を確立し、本分科会に属する多施設、多数症例で検討することによって、客観的な重症度バイオマーカーとなるポテンシャルを有しており、精力的な研究が待たれる。

E. 結論

本分科会で策定した「混合性結合組織病2019改定診断基準」を基にして、「混合性結合組織病診療ガイドライン2021」を作成して発刊し、2022年4月からMindsガイドラインライブラリにて一般公開された。診断基準、重症度分類と共に、本ガイドラインに関してもさらなる検討の継続を要すると考えられ、難病プラットフォームを活用し、世界に比類を見ない重要な臨床情報の蓄積を目指し、将来に向けた基盤づくりを着実に実施することが確認された。また、抗SMN抗体が客観的な重症度バイオマーカーとなるポテンシャルを有しており、多施設研究によって検証することの重要性が指摘された。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

1. 田中良哉. 混合性結合組織病MCTD診療ガイドライン2021. 田中良哉編. 南山堂 東京. 2021. pp1-64
2. 室 慶直. 混合性結合組織病. 高橋健造、佐伯秀久編. 皮膚疾患最新の治療2021-2022. 南江堂 東京. 2021. 102-104
3. 田中良哉. 混合性結合組織病(MCTD)診療ガイドライン2021が完成. 薬局. 72: 3530-3536, 2021
4. 平田信太郎. 混合性結合組織病の分類基準と診

療ガイドライン. リウマチ科. 66: 223-228, 2021

5. 田中良哉. MCTDの疾患概念、疫学. リウマチ科 (2022) 67, 647-652
6. 田中良哉. MCTDの疾患概念. 日本臨床 (2023) 81, 330-333
7. 中山田真吾、田中良哉. MCTDの疫学、予後. 日本臨床 (2023) 81, 339-342
8. 宮川一平、田中良哉. MCTDの特徴的な臨床症候、共通する症候. 日本臨床 (2023) 81, 377-382
9. 久保智史、田中良哉. MCTDに有用な臨床検査、生理機能検査. 日本臨床 (2023) 81, 383-387
10. 亀田秀人. 膠原病の早期診断. 日本内科学会雑誌. 111(9), 1869-1873, 2022
11. 亀田秀人. 免疫・炎症疾患の分子標的薬の概要. 日本医師会雑誌. 151(8), 1398-1399, 2022
12. 亀田秀人、小倉剛久. MCTDにおける全身性エリテマトーデス様所見の特徴と治療. 日本臨床. 81(3), 395-398, 2023
13. 藤井 隆夫. 混合性結合組織病. 日本医事新報. 5157, 46-47, 2023
14. 藤井 隆夫、松宮遼. MCTDに伴う無菌性髄膜炎と三叉神経障害の診断と治療. 日本臨床. 81(3), 416-421. 2023
15. 松宮 遼、藤井 隆夫. MCTDの三叉神経障害と無菌性髄膜炎. リウマチ科. 67(6), 679-685, 2022
16. 檜崎 秀彦、伊藤 保彦. 混合性結合組織病(MCTD)診療のupdate 小児のMCTD. リウマチ科 (0915-227X)67 巻6号 Page701-706(2022.06)
17. 檜崎 秀彦、伊藤 保彦. 特集:混合結合組織病(MCTD)-診断と治療の最近の考え方 IV.特論 小児のMCTDの特徴と治療. 日本臨床 第81巻3号 Page 429-435 (2023.03)
18. Kusaka K, Nakano K, Iwata S, Kubo S, Nishida T, Tanaka Y. Two patients with mixed connective tissue disease complicated by pulmonary arterial hypertension showing contrasting responses to pulmonary vasodilators. Mod Rheumatol Case Reports (2020) 4, 253-261
19. Tanaka Y, Kuwana M, Fujii T, Kameda H, Muro Y,

- Fujio K, Itoh Y, Yasuoka H, Fukaya S, Ashihara K, Hirano D, Ohmura K, Tabuchi Y, Hasegawa H, Matsumiya R, Shirai Y, Ogura T, Tsuchida Y, Ogawa-Momohara M, Narazaki G, Inoue Y, Miyagawa I, Nakano K, Hirata S, Mori M. 2019 diagnostic criteria for mixed connective tissue disease (MCTD): from the Japan Research Committee of the Ministry of Health, Labor, and Welfare for systemic autoimmune diseases. *Mod Rheumatol*. 31: 29–33, 2021
20. Ishikawa Y, Nakano K, Tokutsu K, Miyata H, Fujino Y, Matsuda S, Tanaka Y. Estimation of treatment and prognostic factors of pneumocystis pneumonia in patients with connective tissue diseases. *RMD Open*. 7: e001508, 2021
 21. Kuwana M, Gil-Vila A, and Selva-O'Callaghan A. Roles of autoantibodies in the diagnosis and prognosis of interstitial lung disease in autoimmune rheumatic disorders. *Ther. Adv. Musculoskelet. Dis*. 13: 1759720X211032457, 2021
 22. Inoue Y, Suda T, Kitamura H, Okamoto M, Azuma A, Inase N, Kuwana M, Makino S, Nishioka Y, Ogura T, Takizawa A, Ugai H, Stowasser S, Schenkler-Herceg R, and Takeuchi T. Inoue Y, Suda T, Kitamura H, Okamoto M, Azuma A, Inase N, Kuwana M, Makino S, Nishioka Y, Ogura T, Takizawa A, Ugai H, Stowasser S, Schenkler-Herceg R, and Takeuchi T. Efficacy and safety of nintedanib in Japanese patients with progressive fibrosing interstitial lung diseases: subgroup analysis of the randomised, double-blind, placebo-controlled, phase 3 INBUILD trial *Respir. Med*. 187: 106574, 2021
 23. Ota M, Nagafuchi Y, Hatano H, Ishigaki K, Terao C, Takeshima Y, Yanaoka H, Kobayashi S, Okubo M, Shirai H, Sugimori Y, Maeda J, Nakano M, Yamada S, Yoshida R, Tsuchiya H, Tsuchida Y, Akizuki S, Yoshifuji H, Ohmura K, Mimori T, Yoshida K, Kurosaka D, Okada M, Setoguchi K, Kaneko H, Ban N, Yabuki N, Matsuki K, Mutoh H, Oyama S, Okazaki M, Tsunoda H, Iwasaki Y, Sumitomo S, Shoda H, Kochi Y, Okada Y, Yamamoto K, Okamura T, Fujio K. Dynamic landscape of immune cell-specific gene regulation in immune-mediated diseases. *Cell*. 184: 3006–3021, 2021
 24. Muro Y, Yamano Y, Yoshida K, Oto Y, Nakajima K, Mitsuma T, Kikuchi S, Matsumae A, Ogawa-Momohara M, Takeichi T, Kondoh Y, Katayama M, Todoroki Y, Tanaka Y, Satoh M, Akiyama M. Immune recognition of lysyl-tRNA synthetase and isoleucyl-tRNA synthetase by anti-OJ antibody-positive sera. *J Autoimmun*. 122: 102680, 2021
 25. Ogawa-Momohara M, Muro Y, Akiyama M. Overlap of systemic lupus erythematosus and myositis is rare in anti-Ku antibody-positive patients. *Ann Rheum Dis*. 80: e147, 2021
 26. Ogawa-Momohara M, Muro Y, Akiyama M. Response to: 'Anti-Ku antibodies: important points to consider' by Mahler et al. *Ann Rheum Dis*. 80: e183, 2021
 27. Saito S, Endo Y, Nishio M, Uchiyama A, Uehara A, Toki S, Yasuda M, Ishikawa O, Muro Y, Motegi SI. Anti-polymyositis/Scl antibody-positive overlap syndrome of diffuse cutaneous systemic sclerosis, dermatomyositis, systemic lupus erythematosus, and antiphospholipid syndrome. *J Dermatol*. 49: 294–298, 2022
 28. Todoroki Y, Kubo S, Nakano K, Miyazaki Y, Ueno M, Satoh-Kanda Y, Kanda R, Miyagawa I, Hanami K, Nakatsuka K, Saito K, Nakayamada S, Tanaka Y. Nailfold microvascular abnormalities are associated with a higher prevalence of pulmonary arterial hypertension in patients with MCTD. *Rheumatology (Oxford)*. 2022 61(12):4875–4884
 29. Kusaka K, Nakano K, Fukuyo S, Miyazaki Y, Matsunaga S, Tanaka Y. A case of mixed

connective tissue disease complicated by pulmonary hypertension and ascites after addition of pulmonary vasodilators.. *Mod Rheumatol Case Reports* (2022) 6, 203–208

30. Tabata K, Kaminaka C, Yasutake M, Matsumiya R, Inaba Y, Yamamoto Y, Jinnin M and Fujii T. Forearm porphyrin levels evaluated by digital imaging system are increased in patients with systemic sclerosis compared with patients in pre-clinical stage. *Intractable Rare Dis.Res.* 11, 1–6.2022
31. Inoue Y, Ogura T, Yamashita N, Takenaka S, Ito H, Hirata H, Katagiri T, Takakura Y, Imaizumi C, Mizushina K, Imamura M, Kujime R, Hayashi N, Kameda H. Performance of the revised classification criteria for systemic autoimmune rheumatic diseases and their overlap syndromes. *Intern Med* .61(13), 1947–1952. 2022
32. Yamashita Y, Muro Y, Koizumi H, Ogawa-Momohara M, Takeichi T, Akiyama M. Comment on: Disease evolution in a long-term follow-up of 104 undifferentiated connective tissue disease patients. *Clin Exp Rheumatol*, 41(1), 195–196, 2023
33. Narazaki H, Akioka S, Akutsu Y, Araki M, Fujieda M, Fukuhara D, Hara R, Hashimoto K, Hattori S, Hayashibe R, Imagawa T, Inoue Y, Ishida H, Ito S, Itoh Y, Kawabe T, Kitoh T, Kobayashi I, Matsubayashi T, Miyamae T, Mizuta M, Mori M, Murase A, Nakagishi Y, Nagatani K, Nakano N, Nishimura T, Nozawa T, Okamoto N, Okura Y, Sawada H, Sawanobori E, Sugita Y, Tanabe Y, Tomiita M, Yamaguchi KI, Yasuoka R, Yokoyama K. Epidemiology conduction of paediatric rheumatic diseases based on the registry database of the Pediatric Rheumatology Association of Japan. *Mod Rheumatol* (in press)

2. 学会発表

1. 亀田秀人. 分子標的療法による免疫介在性炎症性疾患の最新マネジメン. 第31回日本医学会総会
2. Kameda H. Recent advances and challenges in the concept and management of overlap syndrome including MCTD. 第67回日本リウマチ学会総会・学術集会
3. 亀田秀人. 膠原病におけるグルココルチコイドの副作用と適正使用. 第38回日本臨床リウマチ学会
4. Hiroaki Tanaka, Yukinori Okada, Shingo Nakayamada, Yusuke Miyazaki, Kyuto Sonehara, Shinichi Namba, Suguru Honda, Yuya Shirai, Kenichi Yamamoto, Katsunori Ikari, Masayoshi Harigai, KOSHIRO SONOMOTO and Yoshiya Tanaka. Cohort-wide Immuno-phenotype Deconvolute Immunological and Clinical Heterogeneity Across Autoimmune Rheumatic Diseases. 2023 American College of Rheumatology (ACR) Annual Convergence 第89回米国リウマチ学会総会. San Diego, USA. 令和5年11月10–15日
5. Shinji Izuka, Toshihiko Komai, Takahiro Itamiya, Mineto Ota, Saeko Yamada, Yasuo Nagafuchi, Hirofumi Shoda, Kosuke Matsuki, Kazuhiko Yamamoto, Tomohisa Okamura, Keishi Fujio. Machine Learning-Based Stratification of Mixed Connective Tissue Disease Using Immunophenotyping Data from Patients with Related Autoimmune Diseases. ACR Convergence 2023
6. Shinji Izuka, Toshihiko Komai, Takahiro Itamiya, Mineto Ota, Saeko Yamada, Yasuo Nagafuchi, Hirofumi Shoda, Kosuke Matsuki, Kazuhiko Yamamoto, Tomohisa Okamura, Keishi Fujio. Immunophenotyping-Based Stratification of Mixed Connective Tissue Disease: Advancing Understanding of Heterogeneity by machine learning models. The 2nd International Symposium of Clinical Immunology

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

8. 特許取得

1. 田中良哉、久保智史、佐藤実

出願番号 : 特願 2023-016268

期日 : 令和 5 年 2 月 6 日

弊所No. : KP0036JP

発明の名称 : 混合性結合組織病の重症度
又は予後を評価する方法

9. 実用新案登録

なし

10. その他

なし

令和5年度 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業
分担研究報告書

シェーグレン症候群に関する研究

研究分担者（分科会長） 川上 純 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科先進予防医学共同専攻 教授

研究分担者 内野 裕一 慶應義塾大学医学部眼科学教室 専任講師
太田 晶子 埼玉医科大学医学部社会医学 准教授
篠崎 和美 東京女子医科大学・東京女子医科大学八千代医療センター 准教授
高橋 裕樹 札幌医科大学医学部免疫・リウマチ内科学 教授
田中 良哉 産業医科大学医学部第1内科学講座 教授
坪井 洋人 筑波大学医学医療系膠原病リウマチアレルギー内科学 准教授
富板美奈子 千葉県こども病院アレルギー・膠原病科 部長
中村 英樹 日本大学医学部内科学系血液膠原病内科学分野 教授
花岡 洋成 慶應義塾大学医学部リウマチ・膠原病内科 専任講師
正木 康史 金沢医科大学医学部血液免疫内科学 教授
森山 雅文 九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面病態学講座口腔顎顔面外科学分野 教授

研究協力者 秋月 修治 京都大学医学部附属病院免疫・膠原病内科 助教
東 直人 兵庫医科大学糖尿病内分泌・免疫内科 准教授
石丸 直澄 徳島大学大学院口腔分子病態学 教授
小川 法良 浜松医科大学医学部附属病院免疫・リウマチ内科 病院准教授
川野 充弘 金沢医科大学医学部血液免疫内科学 臨床教授
古賀 智裕 長崎大学病院リウマチ・膠原病内科 講師
清水 俊匡 長崎大学病院臨床研究センター 助教
清水 真弓 九州大学病院口腔画像診断科 講師
高木 幸則 長崎大学歯学部歯学科口腔診断・情報科学 准教授
中山 健夫 京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻健康管理学講座健康情報 教授
西山 進 倉敷成人病センター診療部リウマチ科 部長
松井 聖 兵庫医科大学糖尿病内分泌・免疫内科 教授
三森 経世 医療法人医仁会武田総合病院 院長

研究要旨

本研究プロジェクトにおいては、指定難病の一つであるシェーグレン症候群(SS)に焦点を当て、疫学調査、予防因子・予後予測因子の解析、診断基準の検証・改訂、重症度分類の検証・改訂、診療ガイドライン2017年版の検証などを目的としている。本研究成果により、効率的で安全性の高いスタンダード医療が確立でき、普及することにより患者の予後、QOLの改善、医療費の節約化につながると期待される。

渥美班が掲げる7つの項目を念頭におき、SS分科会としての3年間の研究課題として具体的には以下の4項目を進める。それらは1)SS診療ガイドライン改訂、2)SS分類基準改訂、3)臨床調査個人票検討、4)難病プラットフォームによるレジストリ構築、である。今年度は、難病プラットフォームへの症例登録が進み、診療ガイドライン2017年版の改定作業においては推奨文の作成まで進んでいる。また、その過程で、従来の厚労省改定診断基準(1999年)と実地臨床や他の国際分類基準との乖離点もあり、SS分類基準の改定にも着手した。

A. 研究目的

渥美班が研究班全体として掲げる7つの項目、1) 診断基準や重症度分類の検証と改訂、国際分類基準の検証、及び関連学会承認獲得、2) 診療ガイドライン(GL)の策定と改訂、関連学会承認獲得、3) 臨床個人調査票の解析や検証を通じた指定難病データベース構築への協力、4) 早期診断や診療施設紹介のための自己免疫疾患難病診療ネットワークの構築、5) 難病プラットフォームを利用した疾患レジストリの確立、6) レジストリを活用したAMED 実用化研究事業との連携、7) 血管炎班との共同で行うシステマティックレビュー担当者の育成を念頭におき、シェーグレン症候群(SS) 分科会の3年間の研究課題として具体的には以下の項目を進める。それらは、1. SS 診療ガイドライン改訂、2. SS 分類基準改定、3. 臨床調査個人票検討、4. 難病プラットフォームによるレジストリ構築、を設定している。今年度は、難病プラットフォームへの症例登録を進めると共に、診療ガイドライン 2017 年版の改定作業においては、ガイドライン最終版の承認までを目指している。

B. 研究方法

1. SS 診療ガイドライン改訂：

SS 診療ガイドライン 2017 版は世界初の SS 診療ガイドラインとして高く評価されている。その後、新たな知見が蓄積され、また、患者会が編纂した日本シェーグレン白書 2020 も公表された。これらを加味して、診療ガイドライン改訂を進める。

2. SS 分類基準改定：

本邦では指定難病にも用いられる厚労省改定診断基準(1999年)が普及しているが、その項目には実地臨床との乖離点や他の国際分類基準との乖離点もあり、SS 分類基準の改定(策定)にも着手する。

3. 臨床調査個人票検討：

1. と2. と連動し、特に2. と協働して進める。

4. 難病プラットフォームによるレジストリ構築：難病プラットフォームへの登録を推奨し、レジストリの構築を進める。

(倫理面への配慮)

難病プラットフォームへの倫理申請は、研究代表者 渥美達也教授が「自己免疫疾患における患者レジストリを包含した難病プラットフォーム体制の構築と、それを利活用した長期にわたる全国規模の多施設共同研究」に包括されている。

C. 研究結果

1. SS 診療ガイドライン改訂：

改訂の方針は以下の通りである：

1. 2017 年版に準じ、38 個の CQ に対して、SR レポートの作成、承認を行い、推奨文の作成、推奨の強さの決定を行う。R5 年度末現在、推奨文作成がほぼ終了段階であり、改定に向けて、順調に進捗しているが、当初の計画よりは半年ほど遅延している。

2. 患者会が編纂した日本シェーグレン白書 2020 は詳細なリアルな情報であり、その精度は非常に高い。2017 年版における Minds フィードバックにおいて患者・市民の価値観や意向を反映させるための取り組みについて総評においてコメントされており、この点については日本シェーグレン白書 2020 の内容を、今回の改訂版には盛り込む。

ガイドラインは、臨床所見、検査所見、合併症、小児の SS、治療法、妊娠出産管理に分類され、それぞれの項目の CQ の前後に、BQ やコラムの形式で(おそらく CQ 後のコラムで)、患者白書の内容を盛り込む予定である。また、ガイドラインの最後に、患者白書の内容を活用して、“わが国における SS 診療の実際”(仮)の項を追加する計画である。

2. SS 分類基準改定

1. のガイドライン改定の議論、また、専門医からのコメントで、指定難病にも用いられる厚労省改定診断基準(1999年)項目と実地臨床との乖離点が指摘された(特に指摘されたのは、唾液腺造影：最近はほとんど実施されておらず、超音波検査が主流となりつつあるとローズベンガル試験：最近はほとんど実施されていないであった)。この点も考慮して、SS 分類基準の改定(策定)に着手した。本邦ではフルオレセイン試験が主体であり、まずは今までのデータで、ローズベンガル試験とフルオレセイン試験の精度比較を試みた。森班で集積されたデータ(N=21)における両検査法の一致におけるカッパ係数は0.7以上と良好で

あり、兵庫医科大学、筑波大学、長崎大学、九州大学、眼科チーム（篠崎先生に取りまとめを依頼）での集積で計画する。唾液腺超音波検査に関しては、1. SS 診療ガイドライン改訂における超音波検査と MRI 検査の SR を詳細に調査し、そのレビューで対応可能と判断した。それで対応可能であれば、実際の唾液腺造影との精度比較の再評価は不要と考えられる。

3. 臨床調査個人票検討：

1. と 2. と連動し、特に 2. と協働して進める。今年度は臨床調査個人票とは直接の関連はないが、指定難病の重症度基準の改定を提案した。その内容は；ESSDAI 5 点以上 and/or [ESSPRI 5 点以上 and 客観的評価]
シルマー5mm/5min 以下 and/or vBS3 点以上 and/or クソン 2g/2min 以下 1)Saxon テストで 2g/2min 以下、2)Schirmer 試験で 5mm/5min 以下、3)ローズベンガル試験、蛍光色素試験、あるいはリサミンググリーン試験で van Bijsterveld スコア (vBS) が 3 点以上、の 3 項目のうちいずれか 1 項目が陽性)である。
4. 難病プラットフォームによるレジストリ構築：事務局からの情報において、R3 年 5 月から SS 患者の登録が始まり、R5 年度は 38 名の登録であった。

D. 考察

1. SS 診療ガイドライン改訂は、R5 年度末現在、推奨文作成がほぼ終了段階であり、改定に向けて、順調に進捗しているが、当初の計画よりは半年ほど遅延している。その改定においては患者会が編纂した日本シェーグレン白書 2020 の内容を、CQ の前後に BQ やコラムの形式で、また、ガイドラインの最後に、患者白書の内容を活用して、“わが国における SS 診療の実際”（仮）の項を追加する計画である。2. SS 分類基準改定は、唾液腺造影とローズベンガル試験に関しては順調な進捗が考えられるが、それを含めての全体的な

考察を次年度に開始する。3. 臨床調査個人票検討は、1. と 2. と連動し、特に 2. と協働して進める。4. 難病プラットフォームによるレジストリ構築は、更なる登録を進める。

E. 結論

SS 診療ガイドラインの改訂により、効率的で安全性の高いスタンダードな SS 医療が普及し、それにより患者の予後、QOL の改善、医療費の節約化につながることを期待される。今回の診療ガイドラインの改定は、患者会が編纂した日本シェーグレン白書 2020 の内容を盛り込むが、患者のリアルで、かつ、精度が高い情報が入る世界初の SS 診療ガイドラインとなり、世界から高く評価されることが多いに期待出来る。現状の SS 診断基準[厚生省改訂診断基準（1999 年）]は精度が高いが、その項目には実地臨床との乖離点があること、また、2016 ACR/EULAR 分類基準との乖離点があることなど（SS の臨床治験の登録は 2016 ACR/EULAR 分類基準がほとんどである）があり、厚生省改訂診断基準（1999 年）の改定にも着手する。臨床調査個人票検討と難病プラットフォームによるレジストリ構築は、指定難病データベース構築に必須であり、こちらにも更なる進捗を計画する。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Sakamoto M, Araki J, Moriyama M, Miyahara Y, Kawado T, Yano A, Koga R, Aoyagi R, Murakami Y, Kaneko N, Kawano S, Nakamura S. The utility of oral moisture measurement for the diagnosis of Sjögren's syndrome: Its potential application as a diagnostic criterion.

- 2024 in press.
- 2) Shimizu T, Nishihata S, Nakamura H, Takagi Y, Sumi M, Kawakami A. Anti-centromere antibody positivity is an independent variable associated with salivary gland ultrasonography score in Sjögren's syndrome. *Sci Rep*. 2024 Mar 4;14(1):5303.
 - 3) 清水俊匡, 川上 純. 他科はこう診る！耳鼻咽喉科・頭頸部外科の症候. ドライマウス・口腔内アフタ. 耳鼻咽喉科・頭頸部外科. 2024年3月
 - 4) Nakamura H, Nagahata K, Amaike H, Kanda M, Takahashi H. Case report: Autoinflammatory manifestations in a patient with Sjögren's disease. 2024 Feb; 27(2): e15083.
 - 5) 清水俊匡, 川上 純. 第XI章 膠原病・類縁疾患 6) シェーグレン症候群. 日常診療に活かす診療ガイドライン UP-TO-DATE 2024-2025. P691-695. 2024年2月
 - 6) 中山田真吾, 田中良哉. 膠原病治療における新規治療法の開発. 2024年2月; 288(5): 393-399.
 - 7) 田中良哉. 膠原病・リウマチ性疾患治療の実際と今後の展望. 2024年2月; 32(2): 138-143.
 - 8) Ogata K, Moriyama M, Kawado T, Yoshioka H, Yano A, Matsumura-Kawashima M, Nakamura S, Kawano S. Extracellular vesicles of iPS cells highly capable of producing HGF and TGF- β 1 can attenuate Sjögren's syndrome via innate immunity regulation. 2024 Jan; 113: 110980.
 - 9) Tanaka H, Okada Y, Nakayamada S, Miyazaki Y, Sonehara K, Namba S, Honda S, Shirai Y, Yamamoto K, Kubo S, Ikari K, Harigai M, Sonomoto K, Tanaka Y. Extracting immunological and clinical heterogeneity across autoimmune rheumatic diseases by cohort-wide immunophenotyping. 2024 Jan; 83(2): 242-252.
 - 10) Flores-Chávez A, Brito-Zerón P, Ng WF, Szántó A, Rasmussen A, Priori R, Baldini C, Armagan B, Özkiziltaş B, Praprotnik S, Suzuki Y, Quartuccio L, Hernández-Molina G, Inanc N, Bartoloni E, Rischmueller M, Reis-de Oliveira F, Fernandes Moça Trevisani V, Jurcut C, Nordmark G, Carubbi F, Hofauer B, Valim V, Pasoto SG, Retamozo S, Atzeni F, Fonseca-Aizpuru E, López-Dupla M, Giacomelli R, Nakamura H, Akasbi M, Thompson K, Fanny Horváth I, Farris AD, Simoncelli E, Bombardieri S, Kilic L, Tufan A, Perdan Pirkmajer K, Fujisawa Y, De Vita S, Abacar K, Ramos-Casals M; Sjögren Big Data Consortium. Influence of exposure to climate-related hazards in the phenotypic expression of primary Sjögren's syndrome. *Clin Exp Rheumatol*. 2023 Dec;41(12):2437-2447.
 - 11) Brito-Zerón P, Flores-Chávez A, Ng WF, Fanny Horváth I, Rasmussen A, Priori R, Baldini C, Armagan B, Özkiziltaş B, Praprotnik S, Suzuki Y, Quartuccio L, Hernandez-Molina G, Abacar K, Bartoloni E, Rischmueller M, Reis-de Oliveira F, Fernandes Moça Trevisani V, Jurcut C, Fugmann C, Carubbi F, Hofauer B, Valim V, Pasoto SG, Retamozo S, Atzeni F, Fonseca-Aizpuru E, López-Dupla M, Giacomelli R, Nakamura H, Akasbi M, Thompson K, Szántó A, Farris AD, Villa M, Bombardieri S, Kilic L, Tufan A,

- Perdan Pirkmajer K, Fujisawa Y, de Vita S, Inanc N, Ramos-Casals M; Sjögren Big Data Consortium. Exposure to air pollution as an environmental determinant of how Sjögren's disease is expressed at diagnosis. *Clin Exp Rheumatol*. 2023 Dec;41(12):2448-2457.
- 12) 富板美奈子. 小児の自己免疫疾患 up-to-date. *アレルギー*. 2023 Nov: 72(9): 1113-1119.
 - 13) Takagi Y, Katayama I, Eida S, Sasaki M, Shimizu T, Sato S, Hashimoto K, Mori H, Otsuru M, Umeda M, Kumai Y, Toya R, Kawakami A, Sumi M. Three signs to help detect Sjögren's syndrome: incidental findings on MRI and CT. *J Clin Med*. 2023 Oct; 12(20):6487.
 - 14) Horai Y, Shimizu T, Umeda M, Nishihata SY, Nakamura H, Kawakami A. Current Views on Pathophysiology and Potential Therapeutic Targets in Sjögren's Syndrome: A Review from the Perspective of Viral Infections, Toll-like Receptors, and Long-Noncoding RNAs. *J Clin Med*. 2023 Sep 10;12(18):5873.
 - 15) Nakamura H, Tanikawa Y, Nishihara M, Tsukamoto M, Nagasawa Y, Akiya K, Natori N, Kitamura N, Takayama T, Nakajima H. Aseptic meningitis followed by mononeuritis multiplex in a patient with primary Sjögren's syndrome. *J Int Med Res*. 2023 Aug;51(8):3000605231189121.
 - 16) 内野裕一. ドライアイにおけるグライコカリックスの破綻について. *Glycoforum*. 26(3): A15. 2023 Aug
 - 17) Narazaki H, Akioka S, Akutsu Y, Araki M, Fujieda M, Fukuhara D, Hara R, Hashimoto K, Hattori S, Hayashibe R, Imagawa T, Inoue Y, Ishida H, Ito S, Itoh Y, Kawabe T, Kitoh T, Kobayashi I, Matsubayashi T, Miyamae T, Mizuta M, Mori M, Murase A, Nakagishi Y, Nagatani K, Nakano N, Nishimura T, Nozawa T, Okamoto N, Okura Y, Sawada H, Sawanobori E, Sugita Y, Tanabe Y, Tomiita M, Yamaguchi KI, Yasuoka R, Yokoyama K. Epidemiology and conduction of paediatric rheumatic diseases based on the registry database of the Pediatric Rheumatology Association of Japan. *Mod Rheumatol*. 2023 Aug;33(5):1021-1029.
 - 18) Brito-Zerón P, Flores-Chávez A, Horváth IF, Rasmussen A, Li X, Olsson P, Vissink A, Priori R, Armagan B, Hernandez-Molina G, Praprotnik S, Quartuccio L, Inanc N, Özkızıltaş B, Bartoloni E, Sebastian A, Romão VC, Solans R, Pasoto SG, Rischmueller M, Galisteo C, Suzuki Y, Trevisani VFM, Fugmann C, González-García A, Carubbi F, Jurcut C, Shimizu T, Retamozo S, Atzeni F, Hofauer B, Melchor-Díaz S, Gheita T, López-Dupla M, Fonseca-Aizpuru E, Giacomelli R, Vázquez M, Consani S, Akasbi M, Nakamura H, Szántó A, Farris AD, Wang L, Mandl T, Gattamelata A, Kilic L, Pirkmajer KP, Abacar K, Tufan A, de Vita S, Bootsma H, Ramos-Casals M; Sjögren Big Data Consortium. Mortality risk factors in primary Sjögren syndrome: a real-world, retrospective, cohort study. *EClinicalMedicine*. 2023 Jul 4:61:102062.
 - 19) Allard-Chamard H, Kaneko N, Bertocchi

- A, Sun N, Boucau J, Kuo HH, Farmer JR, Perugino C, Mahajan VS, Murphy SJH, Premo K, Diefenbach T, Ghebremichael M, Yuen G, Kotta A, Akman Z, Lichterfeld M, Walker BD, Yu XG, Moriyama M, Maehara T, Nakamura S, Stone JH, Padera RF, Pillai S. Extrafollicular IgD-CD27-CXCR5-CD11c- DN3 B cells infiltrate inflamed tissues in autoimmune fibrosis and in severe COVID-19. *Cell Rep*. 2023 Jun; 46(6): 112630.
- 20) Nishihata SY, Shimizu T, Umeda M, Furukawa K, Ohyama K, Kawakami A, Nakamura H. The Toll-like Receptor 7-Mediated Ro52 Antigen-Presenting Pathway in the Salivary Gland Epithelial Cells of Sjögren's Syndrome. *J Clin Med*. 2023 Jun 30;12(13):4423.
- 21) Uchino Y, Uchino M, Mizuno M, Shigeno Y, Furihata K, Shimazaki J. Morphological alterations in corneal nerves of patients with dry eye and associated biomarkers. *Exp Eye Res*. 2023 May; 230:109438.
- 22) Masaki Y, Ueda Y, Yanagisawa H, Sakai T, Yamada K. Castleman disease, TAFRO syndrome and related disorders. *J Health Commun*. 2023 Apr; 8(2).
- 23) 清水俊匡, 川上 純. 特集/シェーグレン症候群の最新の病態理解と治療 1. シェーグレン症候群の診療ガイドライン. *リウマチ科*. 69(4): 369-376. 2023 年 4 月
- 24) 内野裕一, 難波 広幸, 福岡 詩麻, 三間 由美子. ジクアス LX 点眼液 3%登場によりドライアイ治療はどう変わるか? *Frontiers in Dry Eye: 涙液から見たオキュラーサーフェス*. 18(1): 8-14. 2023 Apr
- ## 2. 学会発表
- 1) 加藤大吾, 井上祐三朗, 佐藤義剛, 光永可奈子, 富板美奈子. 自己炎症性乳児期発症腸炎 (AIFEC) で発症したマクロファージ活性化症候群 (MAS) 関連バリエーションをもつ NLRC4 異常症の一例. 第 7 回日本免疫不全・自己炎症学会学術集会. 2024/3/22~3/24. 東京都.
- 2) 高橋知子, 望月孝史, 渡邊直人, 山田和徳, 正木康史. IgG4 関連疾患における FDG PET/CT 所見の検討. 日本核医学会第 97 回中部地方会. 2024/2/17~2/18. 名古屋市.
- 3) Toko H, Tsuboi H, Takahashi H, Honda F, Abe S, Ohyama A, Kitada A, Miki H, Asashima H, Kondo Y, Takayuki Sumida T, Matsumoto I. Altered number of CD8 positive regulatory T cells (CD8+Treg) in peripheral blood and therapeutic potential of the induction of CD8+Treg differentiation by CDK8/19 inhibitor in patients with primary Sjögren's syndrome (pSS). 第 52 回日本免疫学会学術集会. 2024/1/17~1/19. 千葉県.
- 4) Inoue Y, Tomiita M, Sato Y, Kato D, Mitsunaga K, Ogata H. A case of mepolizumab-resistant Kimura's disease responding to dupilumab. *World Allergy Congress 2023*. 2023/12/1~12/3. Thailand.
- 5) Takahashi H. IgG4-related disease. Past, Present, and Future. Taiwan College of Rheumatology annual meeting 2023 Plenary section. 2023/11/25~11/26. Taiwan.
- 6) 佐藤義剛, 緒方仁志, 加藤大吾, 光永可奈子, 井上祐三朗, 富板美奈子. デュピルマブが奏功した木村氏病の小児例. 第 60 回日本小児アレルギー学会学術集会.

- 2023/11/18～11/19. 京都府.
- 7) Tanaka H, Okada Y, Nakayamada S, Miyazaki Y, Sonehara K, Namba S, Honda S, Shirai Y, Yamamoto K, Ikari K, Harigai M, Sonomoto K, Tanaka Y. Cohort-wide Immuno-phenotype Deconvolute Immunological and Clinical Heterogeneity Across Autoimmune Rheumatic Diseases. 2023 American College of Rheumatology (ACR) Annual Convergence. 2023/11/10～11/15.
 - 8) 三島啓太、柳澤浩人、山之内弥矢、上田祐輔、山野高弘、坂井知之、山田和徳、水田秀一、福島俊洋、正木康史. 抗ミトコンドリア抗体陽性の肝障害を基盤に発生した肝原発辺縁帯由来B細胞リンパ腫症例. 第85回日本血液学会学術集会. 2023/10/13～10/15. 東京都.
 - 9) 上田祐輔、正木康史、山之内弥矢、柳澤浩人、山野高弘、坂井知之、山田和徳、福島俊洋、水田秀一、黒瀬望. IgG4-RD, MCD, AITL などと鑑別が問題となったALPIBP症例. 第85回日本血液学会学術集会. 2023/10/13～10/15. 東京都.
 - 10) 佐藤 義剛、加藤 大吾、光永 可奈子、井上祐三朗、冨板 美奈子. 関節型若年性特発性関節炎 121 例に対する生物学的製剤の使用状況と予後の解析. 第32回日本小児リウマチ学会総会・学術集会. 2023/10/13～10/15. さいたま市.
 - 11) 佐藤 裕範、伊藤 ありさ、早田 衣里、山本健、中野 泰至、山出 史也、井上 祐三朗、冨板美奈子、川島 祐介、小原 収、濱田 洋通. 統合プロテオミクスを用いた小児期シェーグレン症候群の疾患モニタリングとバイオマーカー探索. 第32回日本小児リウマチ学会総会・学術集会. 2023/10/13～10/15. さいたま市.
 - 12) 高橋裕樹. IgG4 関連疾患の臨床と線維化病態. 第51回日本臨床免疫学会総会. 2023/10/5～10/7. 東京都.
 - 13) 高木幸則、片山郁夫、柴田 智、佐々木美穂、清水俊匡、川上 純、角 美佐. シェーグレン症候群の早期診断のためのMRI およびCTの新たな徴候. 第31回日本シェーグレン症候群学会学術集会. 2023/9/22～9/23. 浜松市.
 - 14) 安部沙織、坪井洋人、東光裕史、本田文香、大山綾子、北田彩子、三木春香、浅島弘光、近藤裕也、松本功. 一次性シェーグレン症候群 (pSS) の唾液腺、末梢血間のCD4+T細胞サブセットのクローナリティーと分化誘導機構の解析. 第31回日本シェーグレン症候群学会学術集会. 2023/9/22～9/23. 浜松市.
 - 15) 東光裕史、坪井洋人、高橋広行、本田文香、安部沙織、大山綾子、北田彩子、三木春香、浅島弘光、近藤裕也、住田孝之、松本功. 一次性シェーグレン症候群におけるCD8陽性制御性T細胞と臨床像との関連解析、およびその分化誘導による病態制御. 第31回日本シェーグレン症候群学会学術集会. 2023/9/22～9/23. 浜松市.
 - 16) 坪井洋人、東光裕史、安部沙織、本田文香、北田彩子、浅島弘光、大山綾子、三木春香、近藤裕也、松本功. 獲得免疫異常を標的としたシェーグレン症候群の新規治療. 第31回日本シェーグレン症候群学会学術集会. 2023/9/22～9/23. 浜松市.
 - 17) 山野高弘、山田和徳、山之内弥矢、上田祐輔、柳澤浩人、岩男悠、坂井知之、河南崇典、妹尾貴紀、長澤達也、川崎康弘、水田秀一、福島俊洋、正木康史. 中枢神経ループスとの鑑別に苦慮した躁症状を伴う原発性シェーグレン症候群の一例. 第31回日本シェーグレン症候群学会学術集会.

- 2023/9/22～9/23. 浜松市.
- 18) 山之内弥矢, 上田祐輔, 山野高弘, 柳澤浩人, 岩男悠, 坂井知之, 河南崇典, 山田和徳, 水田秀一, 福島俊洋, **正木康史**. IgA- κ 型M蛋白血症を合併したシェーグレン症候群の一例. 第31回日本シェーグレン症候群学会学術集会. 2023/9/22～9/23. 浜松市.
 - 19) 高野慧一郎, 高橋守, 永山大貴, 北村智香子, 練合一平, 竹中遙, 小玉賢太郎, 宮島さつき, **高橋裕樹**, 千葉弘文. 経気管支冷凍生検でIgG4陽性細胞浸潤を認めた剥離性間質性肺炎の一例. 第31回日本シェーグレン症候群学会学術集会. 2023/9/22～9/23. 浜松市.
 - 20) 亀倉隆太, 山本圭佑, 神田真聡, 山本元久, **高橋裕樹**, 高野賢一. デュピリマブ投与によるIgG4関連疾患の臨床的有用性と免疫学的変化の検証. 第31回日本シェーグレン症候群学会学術集会. 2023/9/22～9/23. 浜松市.
 - 21) **冨板美奈子**. 生涯を見据えたシェーグレン症候群の診療～小児期のシェーグレン症候群. 第31回日本シェーグレン症候群学会学術集会. 2023/9/22～9/23. 浜松市.
 - 22) **中村英樹**, 長澤洋介, 北村 登, 塚本昌子, 永田欽也. HTLV-1によるシェーグレン症候群患者抗Ro60/SS-A抗体の抑制. 第31回日本シェーグレン症候群学会学術集会. 2023/9/22～9/23. 浜松市.
 - 23) 秋谷久美子, 西原正浩, 長澤洋介, 猪股弘武, 北村 登, **中村英樹**. 唾液分泌量正常シェーグレン症候群における診断精度を考慮したSS診断基準における唾液腺シンチ所見. 第31回日本シェーグレン症候群学会学術集会. 2023/9/22～9/23. 浜松市.
 - 24) 佐藤義剛, 加藤大吾, 光永可奈子, 井上祐三朗, **冨板美奈子**. アダリムマブの関与が疑われるIgA血管炎を合併した若年性特発性関節炎の1例. 第226回日本小児科学会千葉地方会. 2023/9/10. 千葉市.
 - 25) **内野裕一**. 水濡れ性を意識したドライアイにおける点眼治療. Dry eye Seminar In 多摩. 2023/9/6. 東京都.
 - 26) **内野裕一**. 患者満足度を向上させるドライアイ診療. フォーサム2023大阪. 2023/7/7～7/9. 大阪府.
 - 27) Abe S, **Tsuboi H**, Honda F, Toko H, Kitada A, Miki H, Asashima H, Kondo Y, Matsumoto I. T follicular helper cells in blood mirror salivary gland-infiltrating T cells in primary Sjögren's syndrome (pSS). 第2回国際臨床免疫シンポジウム. 2023/5/19～5/20. 鎌倉市.
 - 28) Abe S, **Tsuboi H**, Toko H, Honda F, Kitatada A, Miki H, Asashima H, Kondo Y, Matsumoto I. T follicular helper cells in blood mirror salivary gland-infiltrating T cells in primary Sjögren's syndrome. European Congress of Rheumatology (EULAR) 2023. 2023/5/31～6/3. Italy.
 - 29) **坪井洋人**, 安部沙織, 東光裕史, 本田文香, 北田彩子, 浅島弘充, 三木春香, 近藤裕也, 松本功. 獲得免疫異常の観点からみたシェーグレン症候群の病態と治療～自己抗体と抗原特異的T細胞の病態形成における役割と治療標的の可能性～. 第67回日本リウマチ学会総会・学術集会. 2023/4/24～4/26. 福岡市.
 - 30) Abe S, **Tsuboi H**, Honda F, Toko H, Kitada A, Miki H, Asashima H, Kondo Y, Matsumoto I. T follicular helper cells in blood mirror salivary gland-infiltrating T cells in primary

Sjögren's syndrome (pSS). 第 67 回日本
リウマチ学会総会・学術集会. 2023/4/24～
4/26. 福岡市.

- 31) 東光裕史, 坪井洋人, 高橋広行, 本田文香,
安部沙織, 大山綾子, 北田彩子, 三木春香,
浅島弘充, 近藤裕也, 住田孝之, 松本功.
一次性シェーグレン症候群 (pSS) における
CD8 陽性制御性 T 細胞 (CD8+Treg) の変化と
その分化誘導による病態制御. 第 67 回日本
リウマチ学会総会・学術集会. 2023/4/24～
4/26. 福岡市.
- 32) 柳澤浩人, 山田和徳, 上田祐輔, 岩男悠,
坂井知之, 河南崇典, 高橋知子, 望月孝史,
水田秀一, 正木康史. PET/CT が診断に有用
であった側頭動脈炎所見を有さない高齢発
症大型血管炎の 3 例. 第 67 回日本リウマチ
学会総会・学術集会. 2023/4/24～4/26. 福

岡市.

- 33) 上田祐輔, 正木康史, 柳澤浩人, 岩男悠,
河南崇典, 坂井知之, 山田和徳, 水田秀一,
川端 浩, 本田奈々瀬. 後方視的に登録され
た TAFERO 症候群 131 症例における自己抗体
陽性群と陰性群との比較. 第 67 回日本リウ
マチ学会総会・学術集会. 2023/4/24～
4/26. 福岡市.

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

11. 特許取得

なし

12. 実用新案登録

なし

13. その他

特記事項なし

令和5年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業
分担研究報告書

若年性特発性関節炎/成人発症スチル病に関する調査研究

分科会長 兼 若年性特発性関節炎分担班長：

森 雅亮 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科生涯免疫難病学講座 教授

成人発症スチル病分担班長：

三村 俊英 埼玉医科大学医学部リウマチ膠原病科 教授

研究分担者：

岡本 奈美 大阪医科薬科大学医学部医学科 非常勤講師

金子 祐子 慶應義塾大学医学部リウマチ・膠原病内科 教授

川畑 仁人 聖マリアンナ医科大学リウマチ・膠原病・アレルギー内科 主任教授

清水 正樹 東京医科歯科大学病院小児科 講師

杉原 毅彦 東邦大学医療センター大森病院 リウマチ膠原病センター（膠原病科） 准教授

研究協力者：

梅林 宏明 宮城県立こども病院総合診療科 部長

小嶋 雅代 名古屋市立大学 特任教授

近藤 裕也 筑波大学医学医療系膠原病リウマチアレルギー内科学 講師

杉田 侑子 大阪医科薬科大学医学部泌尿発達・生殖医学講座小児科学教室 助教

多田 芳史 佐賀大学医学部膠原病・リウマチ内科 診療教授

舟久保 ゆう 埼玉医科大学医学部リウマチ膠原病科 教授

松井 利浩 国立病院機構相模原病院臨床研究センターリウマチ性疾患研究部 部長

水田 麻雄 兵庫県立こども病院リウマチ科 医長

八角 高裕 京都大学大学院医学研究科発生発達医学講座発達小児科学 准教授

成戸 卓也 神奈川県立こども医療センター 主任研究員

研究要旨

本研究では、平成5～7年度の最終目標として、1) 成人スチル病(ASD)に対する診断基準・重症度分類を含む診療GLの検証、2) マクロファージ活性化症候群(MAS)国際分類のASDにおける評価、3) ASD/AOSD(成人発症スチル病)/sJIA(全身型若年性特発性関節炎)の概念および用語の整理、4) 関節炎型JIAの診断基準・重症度分類の検証、5) 臨床個人調査票による疫学調査、6) GRADE法によるJIA診療GLの作成および公表、の6項目の実現を目指す。

具体的な活動内容として、(1)難病プラットフォームを活用した若年性特発性関節炎(JIA)/成人スチル病(ASD)レジストリの構築と病態研究、(2)「ASD診療ガイドライン2017年度版」の補遺版の見直し、(3)GRADE法による「JIA診療ガイドライン」の作成、(4)マクロファージ活性化症候群の診断基準の策定、(5)ASDから成人発症スチル病(AOSD)への呼称変更(令和6年4月に公開予定)、(6)JIA/AOSD合同のWEB医療講演会の実施、を3年間で計画している。

令和5年度は、(1)～(6)のすべての課題について、研究活動を行い、順調な進捗をみた。

A. 研究目的

本研究では、平成 5～7 年度の最終目標

- 1) 成人スチル病(ASD)に対する診断基準・重症度分類を含む診療 GL の検証、
- 2) マクロファージ活性化症候群(MAS)国際分類の ASD における評価、
- 3) ASD/AOSD (成人発症スチル病) /sJIA (全身型若年性特発性関節炎) の概念および用語の整理、
- 4) 関節炎型 JIA の診断基準・重症度分類の検証、
- 5) 臨床個人調査票による疫学調査、
- 6) GRADE 法による JIA 診療 GL の作成および公表、の 6 項目の実現を目指す。

その実現に向けて、3 年間で以下の 6 つの具体的な活動を着実に実行し遂行する。

- (1) 難病プラットフォームを活用した若年性特発性関節炎(JIA)/成人スチル病(ASD)レジストリの構築と病態研究、
- (2) 「ASD 診療ガイドライン 2017 年度版」の補遺版の見直し、
- (3) GRADE 法による「JIA 診療ガイドライン」の作成、
- (4) マクロファージ活性化症候群の診断基準の策定、
- (5) ASD から成人発症スチル病(AOSD)への呼称変更、
- (6) JIA/AOSD 合同の WEB 医療講演会の実施

B. 研究方法

本研究では、平成 5～7 年度の最終目標として、そのために、令和 5 年度は、3 年間の活動内容として掲げた(1)～(6)すべてに着手した(「A. 研究目的」参照)。

(倫理面への配慮)

- 1) 「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に則して、研究を行う。研究内容は、研究代表者および分担研究者の施設での倫理審査の承認後、診療録の後方視学的解析および患者あるいは保護者の同意済の保存血清を使用する。各施設で貼付するポスターに記載する等して倫理的配慮を行っていく。
- 2) 個人情報の保護に関する法律(平成 15 年 5 月法律第 57 号)第 50 条の規定に沿い、得られた患者の情報は外部に一切漏れないように厳重に管理した。研究結果の公表に際しては、個人の特定が不可能であるよう配慮した。

C. 結果

本年度に掲げていた活動により、下記の成果を

得た。

- (1) 難病プラットフォームを活用した若年性特発性関節炎(JIA)/成人スチル病(ASD)レジストリの構築と病態研究

・レジストリに登録したデータを駆使し、以下のような計画を立案した。

＜JIA/AOSD の治療戦略の策定＞

- ① JIA/AOSD の寛解基準と治療目標の策定
- ② JIA/AOSD の病型に応じた治療目標の策定
- ③ 目標達成に向けた治療戦略の策定

＜難病プラットフォームを用いた JIA/AOSD レジストリ研究＞

- ① JIA/AOSD の最適な寛解導入療法の検討
- ② JIA/AOSD の臨床情報および血清検体の管理体制の整備
- ③ AOSD に合併したマクロファージ活性化症候群の診断基準の策定
- ④ JIA/AOSD に合併したマクロファージ活性化症候群の診断基準の策定

＜JIA/AOSD における診断、合併症予測、活動性評価に有用なバイオマーカーの同定＞

- ① JIA/AOSD の診断における補助診断指標としての血清 IL-18 値の有用性の検討
 - ② IL-18 の新規キットの開発
 - ③ その他の血清サイトカイン、パイロトーシス関連、インフラマソーム関連分子の有用性の検討
- ・今後の方向性として、分担班内で共有できたので、AMED 研究で進めていく。新規で令和 6 年度から 3 年間で AMED 研究「全身型若年性特発性関節炎に対する診断率向上および治療効果、予後予測指標の確立を目指したエビデンス創出研究」(研究開発代表者: 清水正樹先生)が採択された。

- (2) 「ASD 診療ガイドライン 2017 年度版」改訂版の見直し

・令和 5 年度に、成人スチル病診療ガイドライン「2023 年 Update」版が刊行されたので、これから見直し作業を進めていく。

- (3) GRADE 法による「JIA 診療ガイドライン」の作成
- ・全身型/少関節炎型/多関節炎型 JIA の全年齢を対象にして、ガイドライン作成指導者の指示を仰ぎ、小児リウマチ医、内科リウマチ医、眼科医、患者/家族が協力してガイドラインを作成中であり、令和 6 年度内に完成・発刊を目指している。

・JIA 初期診療の手引き 2017 の改訂も兼ねての作業を行っている。

- (4) マクロファージ活性化症候群(MAS)の診断基準の策定

・全身型 JIA に合併する MAS に対する Ravelli らの分類基準が、①生物学的療法使用下 (Shimizu M

et al. *Pediatr Rheum* 2020;18:2)

あるいは②ASD (Tada Y et al. *Rheumatol Int* 2019;39:97-104) で適用されるかを検証した。

・その後の課題解決に向けた研究計画を立案中である。

(5) ASD から成人発症スチル病 (AOSD) への呼称変更

・令和 6 年 4 月に改訂され、公開予定。

(6) JIA/AOSD 合同の WEB 医療講演会の実施

・例年通り、JIA 分担任と AOSD 分担任で座談会 (ディスカッション) を開催し、公表を博した。

・事後アンケートの内容から、患者および家族の高い満足度を推し量ることができた。

D. 考察

本年度は、当分科会が現在 3 年間のミッションとして掲げている 6 項目すべてに着手し、研究内容の進展がみられた。初年度として、順調な進捗を示しており、残りの 2 年間での成果が期待される。

E. 結論

今年度の成果を基盤に、平成 5~7 年度の最終目標である、

1) 成人スチル病 (ASD) に対する診断基準・重症度分類を含む診療 GL の検証、

2) マクロファージ活性化症候群 (MAS) 国際分類の ASD における評価、

3) ASD/AOSD (成人発症スチル病) /sJIA (全身型若年性特発性関節炎) の概念および用語の整理、

4) 関節炎型 JIA の診断基準・重症度分類の検証、

5) 臨床個人調査票による疫学調査、

6) GRADE 法による JIA 診療 GL の作成および公表、の 6 項目の実現を目指していく。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

・Omata Y, Tachibana H, Aizaki Y, Mimura T, Sato K. Essentiality of Nfatc1 short isoform in osteoclast differentiation and its self-regulation. *Sci Rep*.13(1) 18797.2023.

・Nakajima S, Tsuchiya H, Ota M, Ogawa M, Yamada S, Yoshida R, Maeda J, Shirai H, Kasai T, Hirose J, Ninagawa K, Fujieda Y, Iwasaki T, Aizaki Y,

Kajiyama H, Matsushita M, Kawakami E, Tamura N, Mimura T, Ohmura K, Morinobu A, Atsumi T, Tanaka Y, Takeuchi T, Tanaka S, Okamura T, Fujio K. Synovial Tissue Heterogeneity in Japanese Patients with Rheumatoid Arthritis Elucidated Using a Cell-Type Deconvolution Approach. *Arthritis Rheumatol*.75(12) 2130-2136. 2023

・Araki Y, Mimura T. Epigenetic Dysregulation in the Pathogenesis of Systemic Lupus Erythematosus. *Int J Mol Sci* 25(2)1019. 2024.

・Akiyama M, Alshehri W, Yoshimoto K, Kaneko Y. T follicular helper cells and T peripheral helper cells in rheumatic and musculoskeletal diseases. *Ann Rheum Dis*. 82(11)1371-1381. 2023.

・Hanaoka H, Kikuchi J, Hiramoto K, Akiyama M, Saito S, Kondo Y, Kaneko Y. Sarcopenia in patients with rheumatic musculoskeletal diseases. *Int J Rheum Dis*. 26(10)2007-2013. 2023.

・Kaneko Y, Saito S, Kojima M, Oshige T, Ota Y, Nishina N, Kikuchi J, Hanaoka H, Tsutomu T. Comparison between the BioPlex 2200 ANA Screen™ and a conventional method with respect to the detection of autoantibodies. *Mod Rheumatol*.31 road075. 2023.

・Kaneko Y, Kameda H, Ikeda K, Yamashita K, Ozaki R, Tanaka Y. Treatment pattern and changes in oral glucocorticoid dose after tocilizumab treatment in patients with adult Still's disease: An analysis of a Japanese claims database. *Int J Rheum Dis*. 26(10)1967-1978. 2023.

・Matsuda M, Asanuma YF, Yokota K, Sakai S, Yazawa H, Maruyama T, Tsuzuki Wada T, Araki Y, Mimura T. New-onset Adult-onset Still's Disease Following COVID-19 Vaccination: Three Case Reports and a Literature Review. *Intern Med*.62. 299-305. 2023.

- Matsuda M, Yokota K, Ichimura T, Sakai S, Maruyama T, Tsuzuki Wada T, Araki Y, Asanuma YF, Akiyama Y, Sasaki A, Mimura T. Encapsulating Peritoneal Sclerosis in Systemic Lupus Erythematosus, Rheumatoid Arthritis, and Systemic Sclerosis. Intern Med. 62. 1683–9. 2023
- Wada TT, Yokota K, Inayoshi F, Sakai S, Okumura N, Matsuda M, Osawa I, Araki Y, Asanuma YF, Akiyama Y, Mimura T. A Case of New-onset Immune-mediated Necrotizing Myopathy and Trigeminal Neuropathy after SARS-CoV-2 mRNA Vaccination in a Patient with Rheumatoid Arthritis and Sjögren's Syndrome. Intern Med. 62. 3699–3706. 2023.
- Matsui T, Yoshida T, Nishino T, Yoshizawa S, Sawada T, Tohma S. Trends in Treatment for Patients with Late-onset Rheumatoid Arthritis in Japan: Data from the NinJa Study. Mod Rheumatol. 22(1) roae006 2024.
- Nogi S, Oka S, Higuchi T, Furukawa H, Shimada K, Azuma T, Sugiyama T, Hirano F, Okamoto A, FujiMori M, Horai Y, Ihata A, Hashimoto A, Komiya A, Matsui T, Fukui N, Katayama M, Migita K, Tohma S. Human leucocyte antigens and Japanese patients with polymyalgia rheumatica: the protective effect of DRB1*09:01.RMD Open. 10(1) e003897. 2024.
- Komiya Y, Sugihara T, Hirano F, Matsumoto T, Kamiya M, Sasaki H, Hosoya T, Kimura N, Ishizaki T, Mori M, Tohma S, Yasuda S, Matsui T. Factors associated with impaired physical function in elderly rheumatoid arthritis patients who had achieved low disease activity. Mod Rheumatol. 34(1) 60–67. 2023.
- Mizushima M, Sugihara T, Matsui T, Urata Y, Tohma S, Kawahata K. Comparison between rheumatoid arthritis with malignant lymphoma and other malignancies: Analysis of a National Database of Rheumatic Disease in Japan. Semin Arthritis Rheum. 63. 1967–1978 2023.
- Fusama M, Nakahara H, Gregg M, Kuroe Y, Urata Y, Kawahata K, Kawahito Y, Kojima M, Sugihara T, Hashimoto M, Miyamae T, Murashima A, Mori M, Yajima N, Matsui T. Challenges faced by nurses engaged in rheumatology care in Japan. Mod Rheumatol. 34. road079. 2023.
- Goto M, Takahashi H, Yoshida R, Itamiya T, Nakano M, Nagafuchi Y, Harada H, Shimizu T, Maeda M, Kubota A, Toda T, Hatano H, Sugimori Y, Kawahata K, Yamamoto K, Shoda H, Ishigaki K, Ota M, Okamura T, Fujio K. Age-associated CD4+ T cells with B cell-promoting function regulated by ZEB2 in autoimmune diseases. Sci Immunol. 82(11) : eadk1643. 2024.
- Miyamoto T, Izawa K, Masui S, Yamazaki A, Yamasaki Y, Matsubayashi T, Shiraki M, Ohnishi H, Yasumura J, Tomohiro K, Miyamae T, Matsubara T, Arakawa N, Ishige T, Takizawa T, Shimbo A, Shimizu M, Kimura N, Maeda Y, Maruyama Y, Shigemura T, Furuta J, Sato S, Tanaka H, Izumikawa M, Yamamura M, Hasegawa T, Kaneko H, Nakagishi Y, Nakano N, Iida Y, Nakamura T, Wakiguchi H, Hoshina T, Kawai T, Murakami K, Akizuki S, Morinobu A, Ohmura K, Eguchi K, Sonoda M, Ishimura M, Furuno K, Kashiwado M, Mori M, Kawahata K, Hayama K, Shimoyama K, Sasaki N, Ito T, Umebayashi H, Omori T, Nakamichi S, Dohmoto T, Hasegawa Y, Kawashima H, Watanabe S, Taguchi Y, Nakaseko H, Iwata N, Kohno H, Ando T, Ito Y, Kataoka Y, Saeki T, Kaneko U, Murase A, Hattori S, Nozawa T, Nishimura K, Nakano R, Watanabe M, Yashiro M, Nakamura T, Komai T, Kato K, Honda Y, Hiejima E, Yonezawa A, Bessho K, Okada S, Ohara O, Takita J, Yasumi T, Nishikomori R Clinical characteristics of cryopyrin-associated periodic

syndrome and long-term real-world efficacy and tolerability of canakinumab in Japan: results of a nationwide survey. Arthritis

Rheumatol. 2024

- Kawahata K, Ishii T, Gono T, Tsuchiya Y, Ohashi H, Yoshizawa K, Zheng R, Ayabe M, Nishikawa K. Phase 3, multicentre, randomised, double-blind, placebo-controlled, parallel-group study of ustekinumab in Japanese patients with active polymyositis and dermatomyositis who have not adequately responded to one or more standard-of-care treatments. RMD Open 9.e003268. 2023.

- Craig TJ, Reshef A, Li HH, Jacobs JS, Bernstein JA, Farkas H, Yang WH, Stroes ESG, Ohsawa I, Tachdjian R, Manning ME, Lumry WR, Sagner IM, Aygören-Pürsün E, Ritchie B, Sussman GL, Anderson J, Kawahata K, Suzuki Y, Staubach P, Treudler R, Feuersenger H, Glassman F, Jacobs I, Magerl M. Efficacy and safety of garadacimab, a factor XIIa inhibitor for hereditary angioedema prevention (VANGUARD): a global, multicentre, randomised, double-blind, placebo-controlled, phase 3 trial. Lancet. 401.1079–1090. 2023.

- Yuri Shirahama, Ayako Kokuzawa, Yusuke Yamauchi, Yohei Kirino, Hideto Nagai, Yasushi Inoue, Toshiyuki Ota, Yutaka Chifu, Hiroki Mitoma, Mitsuteru Akahoshi, Mariko Sakai, Akihito Maruyama, Akihide Ohta, Masahiro Iwamoto, Yoshifumi Tada. Cluster analysis defines four groups of Japanese patients with adult-onset Still's disease. accepted for publication. DOI: 10.1093/mr/ Mod Rheumatol (accepted) 32.roae023 2024.

- Iwata N, Nishimura K, Hara R, Imagawa T, Shimizu M, Tomiita M, Umebayashi H, Takei S, Seko N, Wakabayashi R, Yokota S. Long-term efficacy and safety of canakinumab in the treatment of systemic juvenile idiopathic

arthritis in Japanese patients: Results from an open-label Phase III study. Mod Rheumatol. 33.1162–1170. 2023

- Ramanan AV, Quartier P, Okamoto N, Foeldvari I, Spindler A, Fingerhutová Š, Antón J, Wang Z, Meszaros G, Araújo J, Liao R, Keller S, Brunner HI, Ruperto N, ; JUVE-BASIS investigators; Paediatric Rheumatology International Trials Organisation.

Baricitinib in juvenile idiopathic arthritis: an international, phase 3, randomised, double-blind, placebo-controlled, withdrawal, efficacy, and safety trial. Lancet. 402(10401).555–570. 2023.

- Yamazaki S, Izawa K, Matsushita M, Moriichi A, Kishida D, Yoshifuji H, Yamaji K, Nishikomori R, Mori M, Miyamae T.

Promoting awareness of terminology related to unmet medical needs in context of rheumatic diseases in Japan: a systematic review for evaluating unmet medical needs.

Rheumatol Int. 43(11)2021–2030. 2023

- Shimizu M, Nishimura K, Iwata N, Yasumi T, Umebayashi H, Nakagishi Y, Okura Y, Okamoto N, Kinjo N, Mizuta M, Yashiro M, Yasumura J, Wakiguchi H, Kubota T, Mouri M, Kaneko U, Mori M.

Treatment for macrophage activation syndrome associated with systemic juvenile idiopathic arthritis in Japan. Int J Rheum Dis. 26(5)938–945. 2023.

- Kaneko S, Shimizu M, Miyaoka F, Shimbo A, Irabu H, Mizuta M, Nakagishi Y, Iwata N, Fujimura J, Mori M, Morio T. The dynamics of laboratory markers reflecting cytokine overproduction in macrophage activation syndrome complicated with systemic juvenile idiopathic arthritis. Clin Immunol. 248 109270. 2023.

- Narazaki H, Akioka S, Akutsu Y, Araki M, Fujieda M, Fukuhara D, Hara R, Hashimoto K, Hattori S, Hayashibe R, Imagawa T, Inoue Y,

Ishida H, Ito S, Itoh Y, Kawabe T, Kitoh T, Kobayashi I, Matsubayashi T, Miyamae T, Mizuta M, Mori M, Murase A, Nakagishi Y, Nagatani K, Nakano N, Nishimura T, Nozawa T, Okamoto N, Okura Y, Sawada H, Sawanobori E, Sugita Y, Tanabe Y, Tomiita M, Yamaguchi KI, Yasuoka R, Yokoyama K. Epidemiology and conduct of paediatric rheumatic diseases based on the registry database of the Pediatric Rheumatology Association of Japan

Mod Rheum. 33.1021-1029. 2023.

• Takagi M, Atsumi T, Matsuno H, Tamura N, Fujii T, Okamoto N, Takahashi N, Nakajima A, Nakajima A, Tsujimoto N, Nishikawa A, Ishii T, Takeuchi T, Kuwana M Safety and effectiveness of baricitinib for rheumatoid arthritis in Japanese clinical practice: 24-week results of all-case post-marketing surveillance. Mod Rheum. 33

647-656 2023.

• Mizuta M, Inoue N, Shimizu M, Sakumura N, Yokoyama T, Kuroda R, Ikawa Y, Sugimoto N, Harada K, Yachie A, Wada T. Distinct roles of IL-18 and IL-1 β in murine model of macrophage activation syndrome. J Allergy Clin Immunol. 152. 940-948. 2023

• 清水正樹. 若年性特発性関節炎. 小児科診療 86. 284-289. 2023.

2. 学会発表

<海外>

• Yokota K, Aizaki Y, Kajiya H, Araki Y, Yazawa H, Akiyama Y, Mimura T. Janus Kinase Inhibitor Suppresses the Differentiation and Function of Tumor Necrosis Factor- α and Interleukin-6-Induced Osteoclasts in Peripheral Blood Monocytes from Patients with Rheumatoid Arthritis EULAR 2023.

• Yokota K, Aizaki Y, Wada TT, Kajiya H, Araki Y, Yazawa H, Akiyama Y, Mimura T. Effects of Janus Kinase Inhibitor on TNF- α and IL-6-Induced Osteoclasts and RANKL-Induced Osteoclasts in Peripheral Blood Monocytes from Patients with Rheumatoid Arthritis. ACR Convergence 2023.

• Yoshida T, Tsuno H, Tohma S, and Matsui T. The efficacy of b/tsDMARDs in rheumatoid arthritis patients not taking methotrexate; a study in the National Database of Rheumatic Diseases in Japan (NinJa). APLAR Congress 2023. 2023 Dec, Chiang Mai, Thailand. (Poster)

• Sawada T, Nishiyama S, Igari S, Matsui T and Tohma S. Lesser Impact of Lower-Small Joint Involvement on Pain Than Upper-Small Joint in Rheumatoid Arthritis: Analysis Based on a Large Rheumatoid Arthritis Database in Japan. ACR Convergence 2023. Nov 14, 2023. San Diego, USA. (Poster Session C: ABSTRACT NUMBER: 2099)

• Tokunaga K, Nishino T, Oshikawa H, Matsui T and Tohma S. Relationship Between Quality of Life and the Region of the Affected Joints in Japanese Patients with Rheumatoid Arthritis: A Cross-sectional Study. ACR Convergence 2023. Nov 13, 2023. San Diego, USA. (Poster Session B: ABSTRACT NUMBER: 1277)

• Sawada T, Nishiyama S, Yamashita S, Matsui T and Tohma S. Clinical Characteristics of Patients with Rheumatoid Arthritis (RA) Who Rate Their Global Assessment of Disease Activity Substantially Lower Than Their Physicians (Negative Discordance) Based on a Large RA Database in Japan: A Rare but Important Subgroup. ACR Convergence 2023. Nov 13, 2023. San Diego, USA. (Poster Session B: ABSTRACT NUMBER: 1268).

• Inoue R, Isojima S, Matsui T, Tohma S and Yajima N. The Number of Rheumatoid Arthritis Patients Who Give up Pregnancy Due to the Disease Is Decreasing. ACR Convergence 2023. Nov 12, 2023. San Diego, USA. (Poster Session A: ABSTRACT NUMBER: 0473)

• Brunner HI, Viola D O, Dimelow R, Calvo Penadés I, Wilkinson C, Rodriguez JCR, Alina Boteanu L, Kamphuis S, Minden K, Horneff G, Anton J, Mori M, Yamasaki Y, Olaiz J M, Marino R, van Maurikl A, Okily M, Yanni E, Wilde P. Pharmacokinetic, Pharmacodynamic, and Safety Profile of Subcutaneous Belimumab in Pediatric Patients With SLE: Analysis of Data From a Multicenter, Open-Label Trial. ACR Convergence 2023

<国内>

• 荒木靖人, 岡元啓太, 相崎良美, 横田和浩, 梶山浩, 舟久保ゆう, 秋山雄次, 門野夕峰, 三

村俊英 関節リウマチ滑膜線維芽細胞における転写因子 SOX11 によるサイトカインとケモカイン遺伝子発現の制御異常.

第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会

・松田真弓, 舟久保ゆう, 江本恭平, 酒井左近, 岡元啓太, 矢澤宏晃, 和田琢, 横田和浩, 梶山浩, 荒木靖人, 秋山雄次, 三村 俊英 COVID-19 ワクチン接種後にリウマチ性疾患を新規発症した 9 例. 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会

・岡元啓太, 秋山雄次, 江本恭平, 酒井左近, 松田真弓, 矢澤宏晃, 和田琢, 梶山浩, 横田和浩, 荒木靖人, 舟久保ゆう, 三村俊英 当科における ANCA 関連血管炎の寛解導入時の治療法と転帰 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会

・松田真弓, 舟久保ゆう, 江本恭平, 酒井左近, 岡元啓太, 矢澤宏晃, 和田琢, 横田和浩, 梶山浩, 荒木靖人, 秋山雄次, 三村俊英. COVID-19 ワクチン接種後にリウマチ性疾患を新規発症した 9 例. 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会 福岡国際会議場 2023 年 4 月 26 日

・川畑仁人. 呼吸器疾患合併関節リウマチのマネジメント. 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会, 2023. 4. 24-26 福岡

・白濱裕梨, 丸山暁人, 石澤彩子, 桐野洋平, 山内雄介, 永井秀人, 井上 靖, 大田俊行, 千布裕, 竹山悠希子, 赤星光輝, 堺真梨子, 三苦弘喜, 大田明英, 岩本雅弘, 多田芳史 成人発症スチル病の臨床タイプ分類と予後. 第 67 回日本リウマチ学会

2023. 4. 24-26

・森 雅亮. 本邦で若年性特発性関節炎に使用できる合成抗リウマチ薬と生物学的製剤 成人との違いは? 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会

・森 雅亮. ライフステージに合わせたシームレスなリウマチ性疾患患者の管理～小児期・AYA 世代から挙児可能年齢まで～ 小児期～AYA 世代の管理オーバービュー. 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会

・川畑仁人. リウマチ・膠原病診療における移行期医療の実践. 第 32 回日本リウマチ学会近畿支部学術集会 2023. 8. 26 奈良

・川畑仁人. 関節リウマチの病態と JAK 阻害薬の果たす役割. 第 51 回日本関節病学会 2023. 7. 22 東京

・川畑仁人. 関節リウマチの関節破壊メカニズムにおける JAK の役割とジセラカ錠の臨床的意義. 第 8 回日本骨免疫学会 2023. 6. 26 石垣

・川畑仁人. シンプルな関節リウマチ治療を目指して～ウパダシチニブの可能性～

第 33 回日本リウマチ学会関東支部学術集会 2023. 12. 16 横浜

・清水正樹. 若年性特発性関節炎の病態からみた治療戦略 TNF α の役割とアダリムマブ治療の実際. 第 32 回日本小児リウマチ学会学術集会

・清水正樹. 「スチル病の病態連続性と移行医療」小児科からみた全身型若年性特発性関節炎/成人発症スチル病の病態と移行医療. 第 32 回日本小児リウマチ学会学術集会

・梅林宏明. 若年性特発性関節炎治療におけるトシリズマブの使い方 “第 32 回日本小児リウマチ学会学術集会. BIO 臨床セミナー3”

・水田麻雄. カナキヌマブ投与中の全身型若年性特発性関節炎におけるマクロファージ活性化症候群の病態解析 第 32 回日本小児リウマチ学会総会・学術集会

・森 雅亮. 小児の炎症性筋疾患. 第 65 回日本小児神経学会学術集会

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む)

14. 特許取得

該当なし。

15. 実用新案登録

該当なし。

16. その他

該当なし。

令和5年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業
分担研究報告書

若年性特発性関節炎/成人発症スチル病に関する調査研究

分科会長 兼 若年性特発性関節炎分担班長：

森 雅亮 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科生涯免疫難病学講座 教授

成人発症スチル病分担班長：

三村 俊英 埼玉医科大学医学部リウマチ膠原病科 教授

研究分担者：

岡本 奈美 大阪医科薬科大学医学部医学科 非常勤講師

金子 祐子 慶應義塾大学医学部リウマチ・膠原病内科 教授

川畑 仁人 聖マリアンナ医科大学リウマチ・膠原病・アレルギー内科 主任教授

清水 正樹 東京医科歯科大学病院小児科 講師

杉原 毅彦 東邦大学医療センター大森病院 リウマチ膠原病センター（膠原病科） 准教授

研究協力者：

梅林 宏明 宮城県立こども病院総合診療科 部長

小嶋 雅代 名古屋市立大学 特任教授

近藤 裕也 筑波大学医学医療系膠原病リウマチアレルギー内科学 講師

杉田 侑子 大阪医科薬科大学医学部泌尿発達・生殖医学講座小児科学教室 助教

多田 芳史 佐賀大学医学部膠原病・リウマチ内科 診療教授

舟久保 ゆう 埼玉医科大学医学部リウマチ膠原病科 教授

松井 利浩 国立病院機構相模原病院臨床研究センターリウマチ性疾患研究部 部長

水田 麻雄 兵庫県立こども病院リウマチ科 医長

八角 高裕 京都大学大学院医学研究科発生発達医学講座発達小児科学 准教授

成戸 卓也 神奈川県立こども医療センター 主任研究員

研究要旨

本研究では、平成5～7年度の最終目標として、1) 成人スチル病(ASD)に対する診断基準・重症度分類を含む診療 GL の検証、2) マクロファージ活性化症候群(MAS)国際分類の ASD における評価、3) ASD/AOSD（成人発症スチル病）/sJIA（全身型若年性特発性関節炎）の概念および用語の整理、4) 関節炎型 JIA の診断基準・重症度分類の検証、5) 臨床個人調査票による疫学調査、6) GRADE 法による JIA 診療 GL の作成および公表、の6項目の実現を目指す。

具体的な活動内容として、(1)難病プラットフォームを活用した若年性特発性関節炎(JIA)/成人スチル病(ASD)レジストリの構築と病態研究、(2)「ASD 診療ガイドライン 2017 年度版」の補遺版の見直し、(3)GRADE 法による「JIA 診療ガイドライン」の作成、(4)マクロファージ活性化症候群の診断基準の策定、(5)ASD から成人発症スチル病（AOSD）への呼称変更（令和6年4月に公開予定）、(6)JIA/AOSD 合同の WEB 医療講演会の実施、を3年間で計画している。

令和5年度は、(1)～(6)のすべての課題について、研究活動を行い、順調な進捗をみた。

A

・ 研究目的

本研究では、平成 5～7 年度の最終目標

- 1) 成人スチル病(ASD)に対する診断基準・重症度分類を含む診療 GL の検証、
- 2) マクロファージ活性化症候群(MAS)国際分類の ASD における評価、
- 3) ASD/AOSD (成人発症スチル病) /sJIA (全身型若年性特発性関節炎) の概念および用語の整理、
- 4) 関節炎型 JIA の診断基準・重症度分類の検証、
- 5) 臨床個人調査票による疫学調査、
- 6) GRADE 法による JIA 診療 GL の作成および公表、の 6 項目の実現を目指す。

その実現に向けて、3 年間で以下の 6 つの具体的な活動を着実に実行し遂行する。

- (1) 難病プラットフォームを活用した若年性特発性関節炎(JIA)/成人スチル病(ASD)レジストリの構築と病態研究、
- (2) 「ASD 診療ガイドライン 2017 年度版」の補遺版の見直し、
- (3) GRADE 法による「JIA 診療ガイドライン」の作成、
- (4) マクロファージ活性化症候群の診断基準の策定、
- (5) ASD から成人発症スチル病 (AOSD) への呼称変更、
- (6) JIA/AOSD 合同の WEB 医療講演会の実施

B. 研究方法

本研究では、平成 5～7 年度の最終目標として、そのために、令和 5 年度は、3 年間の活動内容として掲げた(1)～(6)すべてに着手した(「A.研究目的」参照)。

(倫理面への配慮)

- 1) 「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に則して、研究を行う。研究内容は、研究代表者および分担研究者の施設での倫理審査の承認後、診療録の後方視学的解析および患者あるいは保護者の同意済の保存血清を使用する。各施設で

貼付するポスターに記載する等して倫理的配慮を行っていく。

- 2) 個人情報の保護に関する法律 (平成 15 年 5 月法律第 57 号) 第 50 条の規定に沿い、得られた患者の情報は外部に一切漏れないように厳重に管理した。研究結果の公表に際しては、個人の特定が不可能であるよう配慮した。

C. 結果

本年度に掲げていた活動により、下記の成果を得た。

- (2) 難病プラットフォームを活用した若年性特発性関節炎(JIA)/成人スチル病(ASD)レジストリの構築と病態研究

・レジストリに登録したデータを駆使し、以下のような計画を立案した。

<JIA/AOSD の治療戦略の策定>

- ① JIA/AOSD の寛解基準と治療目標の策定
- ② JIA/AOSD の病型に応じた治療目標の策定
- ③ 目標達成に向けた治療戦略の策定

<難病プラットフォームを用いた JIA/AOSD レジストリー研究>

- ① JIA/AOSD の最適な寛解導入療法の検討
- ② JIA/AOSD の臨床情報および血清検体の管理体制の整備
- ③ AOSD に合併したマクロファージ活性化症候群の診断基準の策定
- ④ JIA/AOSD に合併したマクロファージ活性化症候群の診断基準の策定

<JIA/AOSD における診断、合併症予測、活動性評価に有用なバイオマーカーの同定>

- ① JIA/AOSD の診断における補助診断指標としての血清 IL-18 値の有用性の検討
- ② IL-18 の新規キットの開発
- ③ その他の血清サイトカイン、パイロトーシス関連、インフラマソーム関連分子の有用性の検討
・今後の方向性として、分担班内で共有できたので、AMED 研究で進めていく。新規で令和 6 年度から 3 年間で AMED 研究「全身型若年性特発

性関節炎に対する診断率向上および治療効果、予後予測指標の確立を目指したエビデンス創出研究」(研究開発代表者:清水正樹先生)が採択された。

(2)「ASD 診療ガイドライン 2017 年度版」改訂版の見直し

- ・令和 5 年度に、成人スチル病診療ガイドライン「2023 年 Update」版が刊行されたので、これから見直し作業を進めていく。

(3)GRADE 法による「JIA 診療ガイドライン」の作成

- ・全身型/少関節炎型/多関節炎型 JIA の全年齢を対象にして、ガイドライン作成指導者の指示を仰ぎ、小児リウマチ医、内科リウマチ医、眼科医、患者/家族が協力してガイドラインを作成中であり、令和 6 年度内に完成・発刊を目指している。
- ・JIA 初期診療の手引き 2017 の改訂も兼ねての作業を行っている。

(4)マクロファージ活性化症候群(MAS)の診断基準の策定

- ・全身型 JIA に合併する MAS に対する Ravelli らの分類基準が、①生物学的療法使用下 (Shimizu M et al. *Pediatr Rheum* 2020;18:2)

あるいは②ASD (Tada Y et al. *Rheumatol Int* 2019;39:97-104) で適用されるかを検証した。

- ・その後の課題解決に向けた研究計画を立案中である。

(5)ASD から成人発症スチル病 (AOSD) への呼称変更

- ・令和 6 年 4 月に改訂され、公開予定。

(6)JIA/AOSD 合同の WEB 医療講演会の実施

- ・例年通り、JIA 分担任と AOSD 分担任で座談会(ディスカッション)を開催し、公表を博した。
- ・事後アンケートの内容から、患者および家族の高い満足度を推し量ることができた。

D. 考察

本年度は、当分科会が現在 3 年間のミッション

として掲げている 6 項目すべてに着手し、研究内容の進展がみられた。初年度として、順調な進捗を示しており、残りの 2 年間での成果が期待される。

E. 結論

今年度の成果を基盤に、平成 5~7 年度の最終目標である、

- 1) 成人スチル病(ASD)に対する診断基準・重症度分類を含む診療 GL の検証、
- 2) マクロファージ活性化症候群(MAS)国際分類の ASD における評価、
- 3) ASD/AOSD (成人発症スチル病) /sJIA (全身型若年性特発性関節炎) の概念および用語の整理、
- 4) 関節炎型 JIA の診断基準・重症度分類の検証、
- 5) 臨床個人調査票による疫学調査、
- 6) GRADE 法による JIA 診療 GL の作成および公表、の 6 項目の実現を目指していく。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

- ・ Omata Y, Tachibana H, Aizaki Y, Mimura T, Sato K. Essentiality of Nfatc1 short isoform in osteoclast differentiation and its self-regulation. *Sci Rep*.13(1) 18797.2023.

- ・ Nakajima S, Tsuchiya H, Ota M, Ogawa M, Yamada S, Yoshida R, Maeda J, Shirai H, Kasai T, Hirose J, Ninagawa K, Fujieda Y, Iwasaki T, Aizaki Y, Kajiya H, Matsushita M, Kawakami E, Tamura N, Mimura T, Ohmura K, Morinobu A, Atsumi T, Tanaka Y, Takeuchi T, Tanaka S, Okamura T, Fujio K. Synovial Tissue Heterogeneity in Japanese Patients with Rheumatoid Arthritis Elucidated Using a Cell-Type Deconvolution Approach. *Arthritis Rheumatol*.75(12) 2130-2136.2023

- ・ Araki Y, Mimura T. Epigenetic Dysregulation in the Pathogenesis of Systemic Lupus

Erythematosis. *Int J Mol Sci*

25(2)1019.2024.

• Akiyama M, Alshehri W, Yoshimoto K, Kaneko Y. T follicular helper cells and T peripheral helper cells in rheumatic and musculoskeletal diseases. *Ann Rheum Dis*. 82(11)1371-1381.2023.

• Hanaoka H, Kikuchi J, Hiramoto K, Akiyama M, Saito S, Kondo Y, Kaneko Y. Sarcopenia in patients with rheumatic musculoskeletal diseases. *Int J Rheum Dis*. 26(10)2007-2013.2023.

• Kaneko Y, Saito S, Kojima M, Oshige T, Ota Y, Nishina N, Kikuchi J, Hanaoka H, Tsutomu T. Comparison between the BioPlex 2200 ANA Screen™ and a conventional method with respect to the detection of autoantibodies. *Mod Rheumatol*.31 road075. 2023.

• Kaneko Y, Kameda H, Ikeda K, Yamashita K, Ozaki R, Tanaka Y. Treatment pattern and changes in oral glucocorticoid dose after tocilizumab treatment in patients with adult Still's disease: An analysis of a Japanese claims database. *Int J Rheum Dis*. 26(10) 1967-1978.2023.

• Matsuda M, Asanuma YF, Yokota K, Sakai S, Yazawa H, Maruyama T, Tsuzuki Wada T, Araki Y, Mimura T. New-onset Adult-onset Still's Disease Following COVID-19 Vaccination: Three Case Reports and a Literature Review. *Intern Med*.62.299-305.2023.

• Matsuda M, Yokota K, Ichimura T, Sakai S, Maruyama T, Tsuzuki Wada T, Araki Y, Asanuma YF, Akiyama Y, Sasaki A, Mimura T. Encapsulating Peritoneal Sclerosis in Systemic Lupus Erythematosis, Rheumatoid Arthritis, and Systemic Sclerosis. *Intern Med*.62.1683-9.2023

• Wada TT, Yokota K, Inayoshi F, Sakai S, Okumura N, Matsuda M, Osawa I, Araki Y, Asanuma YF, Akiyama Y, Mimura T. A Case of New-onset Immune-mediated Necrotizing

Myopathy and Trigeminal Neuropathy after SARS-CoV-2 mRNA Vaccination in a Patient with Rheumatoid Arthritis and Sjögren's

Syndrome. *Intern Med*.62.3699-3706.2023.

• Matsui T, Yoshida T, Nishino T, Yoshizawa S, Sawada T, Tohma S. Trends in Treatment for Patients with Late-onset Rheumatoid Arthritis in Japan: Data from the NinJa Study. *Mod Rheumatol*.22(1) roae006 2024.

• Nogi S, Oka S, Higuchi T, Furukawa H, Shimada K, Azuma T, Sugiyama T, Hirano F, Okamoto A, FujiMori M, Horai Y, Ihata A, Hashimoto A, Komiya A, Matsui T, Fukui N, Katayama M, Migita K, Tohma S. Human leucocyte antigens and Japanese patients with polymyalgia rheumatica: the protective effect of DRB1*09:01. *RMD Open*.10(1) e003897. 2024.

• Komiya Y, Sugihara T, Hirano F, Matsumoto T, Kamiya M, Sasaki H, Hosoya T, Kimura N, Ishizaki T, Mori M, Tohma S, Yasuda S, Matsui T. Factors associated with impaired physical function in elderly rheumatoid arthritis patients who had achieved low disease activity. *Mod Rheumatol*.34(1) 60-67.2023.

• Mizushima M, Sugihara T, Matsui T, Urata Y, Tohma S, Kawahata K. Comparison between rheumatoid arthritis with malignant lymphoma and other malignancies: Analysis of a National Database of Rheumatic Disease in Japan. *Semin Arthritis Rheum*.63.1967-1978 2023.

• Fusama M, Nakahara H, Gregg M, Kuroe Y, Urata Y, Kawahata K, Kawahito Y, Kojima M, Sugihara T, Hashimoto M, Miyamae T, Murashima A, Mori M, Yajima N, Matsui T. Challenges faced by nurses engaged in rheumatology care in Japan. *Mod Rheumatol*. 34.road079.2023.

• Goto M, Takahashi H, Yoshida R, Itamiya T, Nakano M, Nagafuchi Y, Harada H, Shimizu T, Maeda M, Kubota A, Toda T, Hatano H, Sugimori Y, Kawahata K, Yamamoto K, Shoda H, Ishigaki K,

Ota M, Okamura T, Fujio K.
Age-associated CD4+ T cells with B cell-promoting function regulated by ZEB2 in autoimmune diseases. *Sci Immunol.* 82(11)
: eadk1643.2024.

- Miyamoto T, Izawa K, Masui S, Yamazaki A, Yamasaki Y, Matsubayashi T, Shiraki M, Ohnishi H, Yasumura J, Tomohiro K, Miyamae T, Matsubara T, Arakawa N, Ishige T, Takizawa T, Shimbo A, Shimizu M, Kimura N, Maeda Y, Maruyama Y, Shigemura T, Furuta J, Sato S, Tanaka H, Izumikawa M, Yamamura M, Hasegawa T, Kaneko H, Nakagishi Y, Nakano N, Iida Y, Nakamura T, Wakiguchi H, Hoshina T, Kawai T, Murakami K, Akizuki S, Morinobu A, Ohmura K, Eguchi K, Sonoda M, Ishimura M, Furuno K, Kashiwado M, Mori M, Kawahata K, Hayama K, Shimoyama K, Sasaki N, Ito T, Umebayashi H, Omori T, Nakamichi S, Dohmoto T, Hasegawa Y, Kawashima H, Watanabe S, Taguchi Y, Nakaseko H, Iwata N, Kohno H, Ando T, Ito Y, Kataoka Y, Saeki T, Kaneko U, Murase A, Hattori S, Nozawa T, Nishimura K, Nakano R, Watanabe M, Yashiro M, Nakamura T, Komai T, Kato K, Honda Y, Hiejima E, Yonezawa A, Bessho K, Okada S, Ohara O, Takita J, Yasumi T, Nishikomori R

Clinical characteristics of cryopyrin-associated periodic syndrome and long-term real-world efficacy and tolerability of canakinumab in Japan: results of a nationwide survey. *Arthritis Rheumatol.*2024

- Kawahata K, Ishii T, Gono T, Tsuchiya Y, Ohashi H, Yoshizawa K, Zheng R, Ayabe M, Nishikawa K. Phase 3, multicentre, randomised, double-blind, placebo-controlled, parallel-group study of ustekinumab in Japanese patients with active polymyositis and dermatomyositis who have not adequately responded to one or more standard-of-care treatments. *RMD Open* 9.e003268.2023.

- Craig TJ, Reshef A, Li HH, Jacobs JS, Bernstein JA, Farkas H, Yang WH, Stroes ESG, Ohsawa I, Tachdjian R, Manning ME, Lumry WR, Saguier IM,

Aygören-Pürsün E, Ritchie B, Sussman GL, Anderson J, Kawahata K, Suzuki Y, Staubach P, Treudler R, Feuersenger H, Glassman F, Jacobs I, Magerl M. Efficacy and safety of garadacimab, a factor XIIa inhibitor for hereditary angioedema prevention (VANGUARD): a global, multicentre, randomised, double-blind, placebo-controlled, phase 3 trial. *Lancet.*401.1079-1090.2023.

- Yuri Shirahama, Ayako Kokuzawa, Yusuke Yamauchi, Yohei Kirino, Hideto Nagai, Yasushi Inoue, Toshiyuki Ota, Yutaka Chifu, Hiroki Mitoma, Mitsuteru Akahoshi, Mariko Sakai, Akihito Maruyama, Akihito Ohta, Masahiro Iwamoto, Yoshifumi Tada. Cluster analysis defines four groups of Japanese patients with adult-onset Still's disease. accepted for publication. DOI: 10.1093/mr/Mod Rheumatol (accepted) 32.roae023 2024.

- Iwata N, Nishimura K, Hara R, Imagawa T, Shimizu M, Tomiita M, Umebayashi H, Takei S, Seko N, Wakabayashi R, Yokota S. Long-term efficacy and safety of canakinumab in the treatment of systemic juvenile idiopathic arthritis in Japanese patients: Results from an open-label Phase III study. *Mod Rheumatol.* 33.1162-1170.2023

- Ramanan AV, Quartier P, Okamoto N, Foeldvari I, Spindler A, Fingerhutová Š, Antón J, Wang Z, Meszaros G, Araújo J, Liao R, Keller S, Brunner HI, Ruperto N, ; JUVE-BASIS investigators; Paediatric Rheumatology International Trials Organisation. Baricitinib in juvenile idiopathic arthritis: an international, phase 3, randomised, double-blind, placebo-controlled, withdrawal, efficacy, and safety trial. *Lancet.* 402(10401).555-570.2023.

- Yamazaki S, Izawa K, Matsushita M, Moriichi A, Kishida D, Yoshifuji H, Yamaji K, Nishikomori R, Mori M, Miyamae T.

Promoting awareness of terminology related to unmet medical needs in context of rheumatic diseases in Japan: a systematic review for evaluating unmet medical needs.

Rheumatol Int. 43(11)2021-2030.2023

• Shimizu M, Nishimura K, Iwata N, Yasumi T, Umebayashi H, Nakagishi Y, Okura Y, Okamoto N, Kinjo N, Mizuta M, Yashiro M, Yasumura J, Wakiguchi H, Kubota T, Mouri M, Kaneko U, Mori M. Treatment for macrophage activation syndrome associated with systemic juvenile idiopathic arthritis in Japan. Int J Rheum Dis.26(5)938-945.2023.

• Kaneko S, Shimizu M, Miyaoka F, Shimbo A, Irabu H, Mizuta M, Nakagishi Y, Iwata N, Fujimura J, Mori M, Morio T. The dynamics of laboratory markers reflecting cytokine overproduction in macrophage activation syndrome complicated with systemic juvenile idiopathic arthritis. Clin Immunol. 248 109270.2023.

• Narazaki H, Akioka S, Akutsu Y, Araki M, Fujieda M, Fukuhara D, Hara R, Hashimoto K, Hattori S, Hayashibe R, Imagawa T, Inoue Y, Ishida H, Ito S, Itoh Y, Kawabe T, Kitoh T, Kobayashi I, Matsubayashi T, Miyamae T, Mizuta M, Mori M, Murase A, Nakagishi Y, Nagatani K, Nakano N, Nishimura T, Nozawa T, Okamoto N, Okura Y, Sawada H, Sawanobori E, Sugita Y, Tanabe Y, Tomiita M, Yamaguchi KI, Yasuoka R, Yokoyama K. Epidemiology and management of paediatric rheumatic diseases based on the registry database of the Pediatric Rheumatology Association of Japan Mod Rheum.33.1021-1029.2023.

• Takagi M, Atsumi T, Matsuno H, Tamura N, Fujii T, Okamoto N, Takahashi N, Nakajima A, Nakajima A, Tsujimoto N, Nishikawa A, Ishii T, Takeuchi T, Kuwana M. Safety and effectiveness of baricitinib for rheumatoid arthritis in Japanese clinical practice: 24-week results of all-case post-marketing surveillance. Mod Rheum.33 647-656 2023.

• Mizuta M, Inoue N, Shimizu M, Sakumura N, Yokoyama T, Kuroda R, Ikawa Y, Sugimoto N, Harada K, Yachie A, Wada T. Distinct roles of IL-18 and IL-1 β in murine model of macrophage activation syndrome. J Allergy Clin

Immunol.152.940-948.2023

• 清水正樹.若年性特発性関節炎.小児科診療 86.284-289.2023.

2.学会発表

<海外>

• Yokota K, Aizaki Y, Kajiyama H, Araki Y, Yazawa H, Akiyama Y, Mimura T. Janus Kinase Inhibitor Suppresses the Differentiation and Function of Tumor Necrosis Factor- α and Interleukin-6-Induced Osteoclasts in Peripheral Blood Monocytes from Patients with Rheumatoid Arthritis EULAR 2023.

• Yokota K, Aizaki Y, Wada TT, Kajiyama H, Araki Y, Yazawa H, Akiyama Y, Mimura T. Effects of Janus Kinase Inhibitor on TNF- α and IL-6-Induced Osteoclasts and RANKL-Induced Osteoclasts in Peripheral Blood Monocytes from Patients with Rheumatoid Arthritis. ACR Convergence 2023.

• Yoshida T, Tsuno H, Tohma S, and Matsui T. The efficacy of b/tsDMARDs in rheumatoid arthritis patients not taking methotrexate; a study in the National Database of Rheumatic Diseases in Japan (NinJa). APLAR Congress 2023. 2023 Dec, Chiang Mai, Thailand. (Poster)

• Sawada T, Nishiyama S, Igari S, Matsui T and Tohma S. Lesser Impact of Lower-Small Joint Involvement on Pain Than Upper-Small Joint in Rheumatoid Arthritis: Analysis Based on a Large Rheumatoid Arthritis Database in Japan. ACR Convergence 2023. Nov 14, 2023. San Diego, USA. (Poster Session C: ABSTRACT NUMBER: 2099)

• Tokunaga K, Nishino T, Oshikawa H, Matsui T and Tohma S. Relationship Between Quality of Life and the Region of the Affected Joints in Japanese Patients with Rheumatoid Arthritis: A Cross-sectional Study. ACR Convergence 2023. Nov 13, 2023. San Diego, USA. (Poster Session B:

ABSTRACT NUMBER: 1277)

・ Sawada T, Nishiyama S, Yamashita S, Matsui T and Tohma S. Clinical Characteristics of Patients with Rheumatoid Arthritis (RA) Who Rate Their Global Assessment of Disease Activity Substantially Lower Than Their Physicians (Negative Discordance) Based on a Large RA Database in Japan: A Rare but Important Subgroup. ACR Convergence 2023. Nov 13, 2023. San Diego, USA. (Poster Session B: ABSTRACT NUMBER: 1268).

・ Inoue R, Isojima S, Matsui T, Tohma S and Yajima N. The Number of Rheumatoid Arthritis Patients Who Give up Pregnancy Due to the Disease Is Decreasing. ACR Convergence 2023. Nov 12, 2023. San Diego, USA. (Poster Session A: ABSTRACT NUMBER: 0473)

・ Brunner HI, Viola D O, Dimelow R, Calvo Penadés I, Wilkinson C, Rodriguez JCR, Alina Boteanu L, Kamphuis S, Minden K, Horneff G, Anton J, Mori M, Yamasaki Y, Olaiz J M, Marino R, van Maurik A, Okily M, Yanni E, Wilde P. Pharmacokinetic, Pharmacodynamic, and Safety Profile of Subcutaneous Belimumab in Pediatric Patients With SLE: Analysis of Data From a Multicenter, Open-Label Trial. ACR Convergence 2023

<国内>

・ 荒木靖人, 岡元啓太, 相崎良美, 横田和浩, 梶山浩, 舟久保ゆう, 秋山雄次, 門野夕峰, 三村俊英 関節リウマチ滑膜線維芽細胞における転写因子 SOX11 によるサイトカインとケモカイン遺伝子発現の制御異常. 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会

・ 松田真弓, 舟久保ゆう, 江本恭平, 酒井左近, 岡元啓太, 矢澤宏晃, 和田琢, 横田和浩, 梶山浩, 荒木靖人, 秋山雄次, 三村 俊英 COVID-19 ワクチン接種後にリウマ

チ性疾患を新規発症した 9 例. 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会

・ 岡元啓太, 秋山雄次, 江本恭平, 酒井左近, 松田真弓, 矢澤宏晃, 和田琢, 梶山浩, 横田和浩, 荒木靖人, 舟久保ゆう, 三村俊英

当科における ANCA 関連血管炎の寛解導入時の治療法と転帰 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会

・ 松田真弓, 舟久保ゆう, 江本恭平, 酒井左近, 岡元啓太, 矢澤宏晃, 和田琢, 横田和浩, 梶山浩, 荒木靖人, 秋山雄次, 三村俊英.

COVID-19 ワクチン接種後にリウマチ性疾患を新規発症した 9 例. 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会 福岡国際会議場 2023 年 4 月 26 日

・ 川畑仁人. 呼吸器疾患合併関節リウマチのマネジメント. 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会, 2023.4.24-26 福岡

・ 白濱裕梨, 丸山暁人, 石澤彩子, 桐野洋平, 山内雄介, 永井秀人, 井上 靖, 大田俊行, 千布 裕, 竹山悠希子, 赤星光輝, 堺真梨子, 三苦弘喜, 大田明英, 岩本雅弘, 多田芳史

成人発症スチル病の臨床タイプ分類と予後. 第 67 回日本リウマチ学会 2023.4.24-26

・ 森 雅亮. 本邦で若年性特発性関節炎に使用できる合成抗リウマチ薬と生物学的製剤 成人との違いは? 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会

・ 森 雅亮. ライフステージに合わせたシームレスなリウマチ性疾患患者の管理～小児期・AYA 世代から挙児可能年齢まで～ 小児期～AYA 世代の管理オーバービュー. 第 67 回日本リウマチ学会総会・学術集会

・ 川畑仁人. リウマチ・膠原病診療における移行期医療の実践. 第 32 回日本リウマチ学会近畿支部学術集会 2023.8.26 奈良

・ 川畑仁人. 関節リウマチの病態と JAK 阻害薬の果たす役割. 第 51 回日本関節病学会 2023.7.22 東京

・ 川畑仁人. 関節リウマチの関節破壊メカニズムにおける JAK の役割とジセラカ錠の臨床的

意義. 第 8 回日本骨免疫学会 2023.6.26 石垣

・川畑仁人. シンプルな関節リウマチ治療を目指して～ウバダシチニブの可能性～

第 33 回日本リウマチ学会関東支部学術集会

2023.12.16 横浜

・清水正樹. 若年性特発性関節炎の病態からみた治療戦略 TNF α の役割とアダリムマブ治療の実際. 第 32 回日本小児リウマチ学会学術集会

・清水正樹. 「スティル病の病態連続性と移行医療」小児科からみた全身型若年性特発性関節炎/成人発症スティル病の病態と移行医療. 第 32 回日本小児リウマチ学会学術集会

・梅林宏明. 若年性特発性関節炎治療におけるトシリズマブの使い方 "第 32 回日本小児リウマチ学会学術集会. BIO 臨床セミナー3"

・水田麻雄. カナキヌマブ投与中の全身型若年性特発性関節炎におけるマクロファージ活性化症候群の病態解析 第 32 回日本小児リウマチ学会総会・学術集会

・森 雅亮. 小児の炎症性筋疾患. 第 65 回日本小児神経学会学術集会

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む)

17. 特許取得

該当なし。

18. 実用新案登録

該当なし。

19. その他

該当なし。

医療講演会実施報告

北海道大学病院リウマチ・腎臓内科 診療講師 藤枝 雄一郎

研究要旨

研究要旨

全自己免疫疾患患者を対象とする医療講演会を、強皮症研究班と合同で、Web 講演会の形で実施した。事前登録制、参加費無料のオンデマンド配信方式として 2023 年 9 月 1 日（金）からの 1 ヶ月間配信し、その後 YouTube で閲覧可能とした (https://www.youtube.com/@_sx811)。事前アンケート調査を行った上で、分科会毎に講演プログラムを構成し、全身性エリテマトーデス、多発性筋炎/皮膚筋炎、混合性結合組織病、シェーグレン症候群、若年性特発性関節炎/成人発症スチル病、全身性強皮症の 6 つのパートを用意した。登録者数は延 1828 名で総視聴回数は 1790 回、幅広い年代の、またほぼ全都道府県におよぶ視聴者に講演を届けることができた。事後アンケートの回答率は 20%弱で、概ね高い評価が得られた。一方で、講演会の周知や視聴者からの質問受付などに課題が残った。今後とも改良を加えながら講演会の開催を継続していくことが重要と考えられた。

A.研究目的

難治性疾患政策研究事業において患者への啓蒙活動は重要な課題であり、2019 年に本事業における初めての試みとして患者向け医療講演会を実施した。参加者の満足度は高く、遠方からの参加者もあり、難病患者に対する専門的で包括的な情報提供の場を、本事業において継続的に設けることの重要性を認識した。また患者の要望に即した内容とするために事前アンケートを実施し、その結果を踏まえて講演内容を整備した。また、強皮症・皮膚線維化疾患の診断基準・重症度分類・診療ガイドライン・疾患レジストリに関する研究班と合同開催の形をとり、全身性強皮症も講演対象疾患に含めた。視聴後のアンケート調査も実施した。

2. 開催概要

日時：2023 年 9 月 1 日～

場所：Web 開催 オンデマンド配信（事前登録

制、参加費無料）

登録受付：2023 年 6 月 30 日（金）～9 月 30 日（土）YouTube

(https://www.youtube.com/@_sx811)

6 つのテーマを設け、登録者は講演の全てを自由に視聴可能とした。

※医療講演会プログラムは、別添のとおり。

3. 結果 登録者数：1828 名（一部重複あり） 総視聴回数：1790 回 テーマ毎内訳：全身性エリテマトーデス 336 回、多発性筋炎/皮膚筋炎 358 回、混合性結合組織病 142 回、シェーグレン症候群 265 回、若年性特発性関節炎/成人発症スチル病 256 回、全身性強皮症 433 回 年齢、性別、都道府県別視聴回数を下記グラフと表に示す。6 つのテーマ毎の事後アンケートの回答率は 15-20% 程度で、「知りたい情報が得られたか」という質問に対し、3 分の 2 程度の方が「期待以上に得られ

た」または「期待通り得られた」と回答した。また、「この講演会を他の患者さんに勧めたいか」という質問に対し、8-9割の方が「強く勧めたい」または「勧めたい」と回答した。自由記載欄でも開催に感謝や高評価のコメントを多く頂いた。

4. 今後の展望

Web講演会の形式を取ることで日本全国の難病患者が視聴することが可能となり、事後アンケートからも改めて本講演会の開催意義が大きいことが確認された。また前回の事後アンケートで視聴期間延長の要望があったことからYouTubeを用いた配信を行った。今後も改良を重ねながら継続的に講演会を実施することで、本研究事業がより患者に寄り添ったものとなることが期待される。謝辞:本講演会の企画・監修・実施にあたり、株式会社コンベンション・リンケージ 小松愛久母様に多大なご助力をいただいた。

プログラム

(1) 全身性エリテマトーデス Systemic Lupus Erythematosus / 抗リン脂質抗体症候群 Antiphospholipid syndrome

座長 渥美 達也 先生 北海道大学病院 リウマチ・腎臓内科

講演1) 全身性エリテマトーデス～新しい治療目標・新薬の登場～

演者：花岡 洋成 先生 慶應義塾大学医学部リウマチ・膠原病内科

講演2) 抗リン脂質抗体症候群 診断・治療・最近の話題

演者：藤枝 雄一郎 先生 北海道大学病院 リウマチ・腎臓内科

(2) 多発性筋炎・皮膚筋炎 PolyMyositis・DermatoMyositis

ご挨拶 藤本 学 先生 大阪大学大学院医学系研究科 皮膚科学教室

講演1) 筋炎の自己抗体

演者：笹井 蘭 先生 京都大学大学院医学研究科内科学講座（臨床免疫学）

講演2) 筋炎の新しい治療

演者：保田 晋助 先生 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科膠原病・リウマチ内科学分野

講演3) 筋炎のリハビリテーション

演者：富満 弘之 先生 JA とりで総合医療センター神経内科

(3) 混合性結合組織病 Mixed Connective Tissue Disease

講演1) 混合性結合組織病（MCTD）

演者：田中 良哉 先生 産業医科大学医学部第1内科学講座

講演2) 混合性結合組織病の治療・管理

演者：亀田 秀人 先生 東邦大学医学部 内科学講座 膠原病学分野

講演3) 混合性結合組織病 ～各病態に対する治療～

演者：桑名 正隆 先生 日本医科大学付属病院 リウマチ・膠原病内科

(4) シェーグレン症候群 Sjögren Syndrome

講演1) 病気の成り立ちと診断 –シェーグレン症候群–

演者：中村 英樹 先生 日本大学医学部内科系 血液膠原病内科学分野

講演2) シェーグレン症候群の疾患活動性の評価

演者：西山 進 先生 倉敷成人病センター・リウマチ膠原病センター

講演3) 口腔乾燥の対処法 ～知って欲しいシェーグレン症候群の口腔症状～

演者：森山 雅文 九州大学大学院歯学研究院 口腔顎顔面病態学講座
顎顔面腫瘍制御学分野

講演4) 眼乾燥への対処

演者：篠崎 和美 先生 東京女子医科大学医学部 眼科学

講演5) 腺外・全身症状と対処について（妊娠含む）

演者：東 直人 先生 兵庫医科大学 糖尿病内分泌・免疫内科

講演6) シェーグレン症候群「新たな治療法の展望」

演者：坪井 洋人 先生 筑波大学医学医療系 膠原病リウマチアレルギー内科学

講演7) 小児期シェーグレン症候群患者の移行期医療

演者：富板 美奈子 先生 千葉県こども病院 アレルギー・膠原病科

(5) 若年性特発性関節炎/成人発症スチル病 Juvenile Idiopathic Arthritis / Adult Onset Still's Disease
(若年性特発性関節炎)

講演 1) 若年性特発性関節炎

演者：岡本 奈美 先生 労働者健康安全機構大阪労災病院 小児科

(成人発症スチル病)

講演・総合討論

座長：三村 俊英 先生 埼玉医科大学 リウマチ膠原病科

講演 1) 病態と症状

演者：川畑 仁人 先生 聖マリアンナ医科大学 リウマチ・膠原病・アレルギー内科

講演 2) 診断と鑑別

演者：多田 芳史 先生 佐賀大学医学部 膠原病・リウマチ内科

講演 3) 合併症

演者：舟久保 ゆう 先生 埼玉医科大学医学部 リウマチ膠原病科

講演 4) 治療と副作用

演者：金子 祐子 先生 慶應義塾大学医学部 リウマチ・膠原病内科

講演 5) ガイドラインと修正点

演者：近藤 裕也 先生 筑波大学医学医療系 膠原病・リウマチ・アレルギー内科学

講演 6) 日常生活の注意点

演者：松井 利浩 先生 独立行政法人国立病院機構相模原病院 リウマチ科

第2部：ディスカッション

司会：三村 俊英 先生 埼玉医科大学 リウマチ膠原病科

ディスカッサント：森 雅亮 先生、清水 正樹 先生、水田 麻雄 先生、岡本 奈美 先生、
川畑 仁人 先生、金子 祐子 先生

(6) 全身性強皮症 Systemic Sclerosis

ご挨拶 浅野 善英 先生 東北大学大皮膚科

講演 1) 全身性強皮症の皮膚病変（皮膚硬化と皮膚潰瘍）

演者：松下 貴史 先生 金沢大学 皮膚科

講演 2) 全身性強皮症の間質性肺疾患

演者：嶋 良仁 先生 大阪大学免疫内科

講演 3) 全身性強皮症の心病変と肺高血圧症

演者：波多野 将 先生 東京大学循環器内科

講演 4) 小児全身性強皮症と移行医療について

演者：宮前 多佳子 先生 東京女子医科大学膠原病リウマチ痛風センター